有島武郎譯

ホイットマン詩集

第一輯

ホイットマン詩集

叢文閣刊行

有島武郎譯

ホヰットマン詩集

第一輯

ホヰットマン詩集 有島武郎譯

叢文閣刊行

Biographical Note — Walt Whitman

1819 -

Born at West H[illegible] State of New York — second c[illegible] Louisa, (Van Velsor) [illegible] 23 continued at West Hill[illegible]

1824

Moved to Brooklyn.

1831, tended in lawyers office.

In 1834 went into printing offe[illegible] ge[illegible] setting. [illegible]

1838

Teaching country school in Suffolk county. Continued at it until [illegible]

ノマトシ井ホ
澤民美島有
輯二第

county. Contract at it, [illegible]
county for three years.
[illegible] for Huntington £2

the Long Island" at Huntington L.I.

1840

Back in New York City working at printing and journalistic writing. In 1846 and '7 edits the "Eagle" newspaper in Brooklyn.

1848

Goes to N. O. as editor on the staff of "the Crescent City". Later afterward travels south and south west.

1850

Returns north. Publishes "the Freeman" newspaper in Brooklyn. Then works at building houses and selling them

1855 ~~1856~~

Issues "Leaves of Grass." first edition, small 4to 95 pages

In 1856 issues edition

Belongs to

Calamus adspersus Bl.
to
"scented herbage
of my breath"
W. W.

井ホトトギス詩集

第一輯

武島羽衣 著

閨文叢

行刊

—1921—

WALT WHITMAN
(1889)

譯者小序

○飜譯の困難、殊に藝術的作品飜譯の困難であることは十分に知つてゐる。而して詩の飜譯に於てその困難は、困難といふ境を越へて不可能であるやうに見える。而して私は敢てこの無謀な企てをはじめた。それ故私は一つの藝術品としてこの譯詩が受け入れられることを期待しない。殊に私は詩人ではない。言葉を純粹に聖別する力を私は授つてゐない。さういふ人が詩を譯すのは分に過ぎたことのやうでもあるけれども、一面にはその申開きが出來るやうにも考へる。詩人は他人の言葉、他人の思想を語ることが出來ない。それ故彼れは飜譯者であるには嚴密にいふと全く不適當であらねばならぬ。詩界の平信者である私は少くとも或詩人に沒入することが出來る。而して自分自身の詩的表現力を有しない私は、詩人のそれに卽することが出來るらしい。この點を力にして、私は日頃愛誦して措かないホヰツトマンの面影をかすかながらにでも、英語を解し得ない讀者に傳へたいと思ひ立つたのだ。それ故この譯詩は原詩のおぼろな影畫に過ぎない。私は唯私の仕事が不完全で拙劣なために、却て詩人を瀆し、引いては彼れを日本の讀書界から遠ざける結果に陷らざらんことを祈るばかりである。

○この仕事をするについて、私は富田碎花氏の既成の飜譯を座右においた。必ず種々な點に於て暗示を受けたに相違ない。この事をこゝに明記しておく。白鳥省吾氏の譯は遂に照合する機會を持たなかつた。岩野泡鳴氏にも多少の飜譯があつたと記憶するが、それも參考にはしなかつた。原本は David McKay, Philadelphia の 'Leaves of grass' 一九〇〇年版を主として採用した。

○ホキツトマン年譜を編むに際して、久保田正彝氏が富田氏の譯本に添へられた傳記から三四の事實を引用した。これも謝意を以て明記しておく。

○私なりに細心の注意はしたつもりだけれども、思ひちがへや誤譯をしてゐる個所が多いに相違ない。如何しても不安な所には括弧をして＊印をつけておくが、若し讀過の際その他の誤謬にも氣附かれた方があつて、是正を惜しまれなかつたら、難有く思ふ。

○譯詩の或ものは「新潮」「大觀」「明星」「新家庭」その他の雜誌新聞に投書したものを再錄した。

○第二卷にはホキツトマンの最長詩篇なる「自己を歌ふ」('Song of Myself')と、詩人に對する私の卑見とを發表したいと思つてゐる。

一九二一、十月七日寒く曇れる夜　　譯者

目次

譯者小序

ホキツトマン年譜 …… 一

譯詩 …… 二五

一八五五年代

顏　Faces… …… 二七

一八五六年代

大道の歌　Song of the Open Road …… 三九

ブルツクリン渡船場を横ぎりて　Crossing Brooklyn Ferry …… 七二

一八六〇年代

ワルト・ホキツトマンの警告　Walt Whitman's Caution …… 九三

結局私は何んだ　What am I after all? ……九四
私の手を握る君が誰であらうと　Whoever You are, Holding Me now in Hand……九五
日の入りに私が聞く時に　When I Heard at the Close of the Day. ……一〇一
私は攻撃されてゐるのを聞く　I Hear it was charged against Me. ……一〇四
私は坐して眺めやる　I Sit and Look Out ……一〇五
おゝ常に生きつゝ——常に死につゝ　O Living always — Always Dying… 一〇九
假象に對する怖ろしき疑ひについて　The terrible Doubt of appearance… 一〇八
私はルイジアナで一本の槲の木の育つのを見た　I saw in Louisiana a Live Oak growing ……一一一
炬火　Torch ……一一三
この瞬間、あこがれの物思はしき　This moment, yearning and thoughtful 一一四

既にありしものと共に　With Antecedents ……一一一
創造の法則　Laws of Creation……一一四
搖り動きやまぬ搖藍から　Out of the Cradle Endlessly Rocking ……一四六
十字架にかけられた彼れに　To Him that was crucified. ……一四八
汝法廷の審判に立てる極重惡人よ　You Felons on Trial in Courts……一五八
名もない淫賣婦に　To a Common Prostitute. ……一五一
見も知らぬ人に　To a Stranger ……一五三
あなたに　To You ……一五五
さゝげもの　Offerings ……一五六

一八六五—六年代

私が觀察をはじめる時　Beginning my Studies ……一五七
敵ではない私に入冠するのは　Not my Enemies ever invade me. ……一五八

大統領リンカーン追頌歌 President Lincoln's Burial Hymn …… 一五八
聖なる死の囁き Whispers of heavenly Death …… 一八四
群衆——その海原のさかまく波間から Out of the rolling Ocean, the Crowd. …… 一九六
畑から來なよお父 Come out from the Fields, Father. …… 一八八
和睦 Reconciliation …… 一九三

一八六七年代

涙 Tears. …… 一九四
船の上、その舳首に Aboard, at a Ship's Helm …… 一九六
別れに臨みて讀者に To the Reader at Parting …… 一九八

一八七 年代

鼓 Drum-taps …… 一九九
神 Gods …… 二〇〇
喜べ、船子よ、喜べよ Joy, Shipmate Joy! …… 二〇三
最後の祈禱 The Last Invocation …… 二〇四

一八七六年代

冬の蒸氣機關車に To a Locomotive in Winter …… 二〇六
牛ならし The Ox Tamer …… 二〇九

一八八七年代

私が書物を讀む時 When I read the Book …… 二一二

年代不明

私が自分の頭を君の膝におく時、仲間よ As I lay with Head in Your Lap, Camerado …… 二一三
自分の魂に To my Soul. …… 二一五

ホヰットマン詩集

装幀　有島武郎
印刷及彫刻　伊上凡骨

ワルト・ホヰットマン年譜

一六六〇――この時代に、スコツトランド人系なるヂヨセフ・ホヰツトマンといへる人がロング・アイランド(Long Island)のハンテイングトン(Huntington)に居を定めた。ワルト(Walt)はこの人より七代目の末裔に當る。

一八一九　五月三十日、ワルト、ロング・アイランドのウエスト・ヒルス(West Hills)に生れた。ロング・アイランドは亞米利加印度人によつてポウマノツク(Paumanock)と呼ばれた南北に長い、海沿ひの島で、「長い魚」といふ意味ださうだ。

父はワルター(Walter)といつて大工職、大男で、默つた、屈托顔をした男、然し敬虔な天性と親切な心の持主で、熱烈な說教家エライヤス・ヒツクス(Elias Hicks)に傾倒してゐた。

母は娘名をルヰザ・ヴアン・ヴエルソア(Louisa van Velsor)といつて、和蘭から移住して來た家族の家に生れた。「頑丈な沈着な家婦、勇悍な騎者で毎日馬を乘りまはした。」

ワルトには八人の兄弟姉妹があつて、その二人目だ。

ヂョース(Josse)―狂癲を起して死んだ。
ワルト(Walt)―詩人自身。
女
女
男――夭折した。
アンドリウ・ヂヤクソン(Andrew Jackson)
ヂョーヂ・ワシントン(Jeorge Washington)南北戰爭に參加して傷を被つた弟。
トーマス・ヂエファーソン(Thomas Jepherson)
エドワード(Edward)――白痴。
文政二年。

この前年トゥルゲニエフ生る。キーツの「エンデイミオン」、バイロンの「チヤイルド・ハロルド」ショーペンハーワアの「意識及び現識としての世界」等出づ。この年ラスキン、エリオット、ロウエル、クルベー等生る。

四歳

一八二〇――ハーバード・スペンサー生る。ラ・マルテーヌの詩集出づ。
一八二一――キーツ、大ナポレオン死す。ドストイエヴスキー、ボードレール生る。
一八二二――シエレー死す。バイロン「ドン・ヂユアン」を完成す。ユーゴー及びハイネ詩集を公けにす。ベトーフエンの「ミサ・ソレムニス」成る。
一八二三　家族と共にロング・アイランドからブルックリン(Brooklyn)に轉住した。ワルトは非常に元氣で、戸外の逍遙や遊戯に熱中したらしい。海岸に出て魚を捕へたり、海鳥の生活を觀察したり、難破船を眼の前に見たり、元始的な印度人が農家の爲めに家畜を放牧してゐるのを見て深い印象を受けたのはこの年あたりから十歳位までの間の事だつたらう。それらの記憶と經驗とは永く詩人の腦裡に刻みつけられてゐて、彼れを自然の歌手たらしめた。
一八二四――バイロン死す。シヤヴアンヌ生る。
一八二七――ベトーフエン及ひブレーク死す。ポーの第一詩集出づ。
一八二八――トルストイ、イブセン、ロゼッテイ、メレデイス等生る。

一八二九――ゲーテの「ウヰルヘルム・マイスター」が完成した。

一八三一――スタンダールの「赤と黑」及びゲーテの「ファウスト」第二部が出た。

十三歳

一八三二――此の年小學校を退學し、爾來一切學校教育なるものを受けなかつた。クラークといふ辯護士の事務所の給仕となり、又或醫師の家にも傭はれてゐた。而して遂にロング・アイランド・パトリオット(Long Island Patriot)といふ新聞の植字工となつた。

その頃ワルトが昵近になつた或人が非常にワルトを愛し、且つ讀書の習慣を養ひ、その便宜を與へてくれた。

ゲーテ、スコット、頼山陽が死んだ。カーライルの「サーター。レザータス」が出た。ビヨルンソン及びマネー生る。

一八三三――ブラウニングの「縛せられたプロメシウス」出づ。

十五歳

一八三四――身體の發育が完全て、堂々として既に成人の風があつたといはれてゐる。

ウヰリヤム・モリス生る。

一八三五――ゴーゴリの「タラス・ブルバ」出づ。

一八三六――エマーソンの「自然論」出づ。

十八歳

一八三七――サツフオーク(Suffook)に行き小さな小學校の教師となる。「嚴格ではなかつたが、權威があつた。その態度は眞摯で、女性に對しては內氣で、宗教的な所は何處にもなかつた」

ヂョン・ヂョンストン(John Johnston)が後年サツフオークを訪れた時、ワルトに教へを受けた一人の男の語る所によれば「彼れは教師として强ち失敗だつたとはいへないが、確かに成功でもなかつた。それは彼れの性に合はなかつた。彼れは教職に出精するより、始終考へたり書いたりしてゐた」云々。

「私が何か後々まで殘るやうなものを書きたいと思ひ立つた最初は、一杯に帆を張つて馳せ行く船を見た時だつた。私はそれを私が見た通りに文字に現はし度いと願つた。」とその頃の出來事を詩人は回想して記してゐる。

スウキンバーン生る。大鹽平八郎大阪に亂を起す。

二十歳

一八三九――ハンテイングトンで週刊ロング・アイランダー(Long Islander)を發行した。執筆から、印刷、校正、配達まで獨りでやつて退ける。

二十一歳

一八四〇——ザ・デイリー・オーロラ(The Daily Aurora)といふ新聞が紐育で發刊されるに際し、入つてその記者となる。その頃、ワルトは高帽に細身の杖を携へ、胸釦には花をさしてゐた。後年の詩人の風采とは大きな對照であつたらしい。その頃ポー(Poe)に私淑し、その文體を眞似て小品を書いたが、精練緻巧を極めたその筆致はポーと雁行するに足る程のものだつた。

「詩——題、『幸福であれ』。戸外に出かけ、凡ての美しく完全なるものを見る」……その頃の詩人の備忘錄より。

ゾラ、ロダン生る。サイモンズ生る。

一八四一——レルモントフ死す。ルノアール生る　エマーソンの論文第一巻出づ。谷文晁死す。

この頃の詩人の愛讀書——舊新約聖書、セークスピヤ、オッシアン、ホーマー、エスキュラス、ソフオクレース、ニーベルンゲン古傳説、古代印度の詩歌、ダンテ、スコット等。

一八四二——マラルメ生る。テニソン第三詩集、ブラウニングの「バイド、バイバア」その他出づ。

二十四歳

一八四三——當時全米を席捲した奴隷問題について考へ、屢これに對する意見を發表した。その頃書いた"Bloody money"といふ詩は、その當時の彼れの思想とスタイルとを窺ふに足るものだ。

ヘルデルリン死す。ラスキンの「近世畫家傳」出づ。

一八四四——ヴエルレーヌ及びニーチエ生る。

一八四五——ドストイエヴスキーの「貧しき人々」、ボーの「鴉」其他、スティネルの「唯一者とその所有」出づ。

二十七歳

一八四六——ブルックリン・イーグル(Brooklyn Eagle)の記者となる。この年前後十年位の間、彼れは紐育の都會生活に多大の興味を寄せ、新しい視角からそれを綿密に觀察した。乘合馬車の御者、渡船の船員、町の女、其他"Powerful uneducated persons"には限りない親愛の心を寄せた。

一八四七——トウルゲニエフの「獵人日記」出で始む。ゴンチヤロフの「オブローモフ」、エマーソンの「詩集」出づ。

二十九歳

一八四八——中米及び西米に漫遊を試み、遂にニュー・オルレアンス(New Orleans)に行つてクレスセント(Cresent)紙の記者となつた。この頃、彼れには情人があつて、その人によつて子を擧げたらしい。「若き壯年時代、中年時代、南方に住んでゐた頃の私の生活は、おもしろをかしく肉的なものであつて、疑ひもなく人の非難を受くべきものだつた。結婚はしなかつたが、六人の子

を擧げた――二人は死んだ――南部に生活してゐる一人の孫は、時折り私に手紙をよこす――或事情、それは彼等の財産と利益とに關係してゐる)の爲めに、二人は親しい間柄にあることが出來ないでゐる」――アデイングトン・サイモンズに後年彼れが書き送つた回答から。

三十一歳

一八四九 ――ポー死す。ストリンドベルヒ、カリエール生る。

一八五〇 ――紐育に歸り、ブルックリン、フリーマン(Brooklyn Freeman)の記者となる。十五歳で成人の風があつた彼れは、三十歳にして頭髮鬚髯共に際立つて白くなつた。この頃から講演者として一生を送らうかと考へたことがあつたが實行しなかつた。

又父の業を繼いで建築業をもした。エマーソンの書いたものを熟讀し出したのもこの頃からであらう。この年の夏「草の葉」中の數篇を草したといはれてゐる。

三十四歳

ウオーズウオース、バルザツク死す。モーパツサン、スティヴンソン生る。バルザツクの「人類喜劇」出づ。米國メキシコと交戰す。

一八五二 ――トルストイの「幼年」「コサツク」出づ。ゴーティエの詩集「琺瑯とカメオ」其他出づ。

一八五三 ――この頃に至つて詩人の生涯の眞目的がやうやく判然として來たやうに見える。「その大

望といふのは、文學的な若くは詩的な形式によつて、妥協することなく、私自身の肉體的、感情的、道德的、理智的並びに詩的な個性を忠實に言葉に表現しようといふことだつた。……この年代、この土地にあつて、特殊な個性を、今までの如何なる詩人よりも如何なる書物よりももつと確實で普遍的な意味に於て探究しようといふ事だつた。」

ゴツホ生る。

一八五四 ――コムトの「實證哲學體系」出づ。ラムボー生る。

三十六歳

一八五五 ――ワルトの生涯に取りても、世界文學の歴史に取りても忘れることの出來ない年。

父が死亡した。

自分の詩集を百部だけ自分で印刷して公けにした。而してそれに「草の葉」(Leaves of Grass)と命名した。それには十二の詩が收められ、九十四頁の小册子だつた。この詩集が起した反響は默殺でなければ嘲罵であつた。ホイツテイヤはこれを火中に投じたといはれてゐる。ロウエルに取つては無意味な言葉の排列だつた。ロンドン・クリテイツク(London Critic)の如きは「ホキツトマンが藝術に暗い程度は、豚が數學に對すると同樣だ」といつてゐる。詩人の母も弟のヂョーヂ

も全くこの書を振向きもしなかつたといつていい。獨りエマーソンのみはその功績を認め「私は君の偉大なる旅程の劈頭にあたつて挨拶を贈る。然しかくの如き出發をする以上、長い前途が横はる事だらう。私は若しやこの日光が錯覺に過ぎないのではないかと思つて、少しばかり眼をこすつたが、この書物の持つ強い識見は疑ふ餘地のないものであるのを確め得た」云々と書き送つてゐる。詩人は後年この時を回想していつてゐる「この書が至る所に嵐のやうな憤怒と詰責とを牽起した時、私はロング・アイランドとペコニック灣の東端にと出かけて行つて、紐育に次のやうな自信ある決意を抱いて歸つて來た。而してこの決意は爾後ゆるんだことがない。卽ち「私は私の詩の事業を獨特なやり方で押通し、力の及ぶ限りそれを完成しよう」と。

三十七歳　ヴェルハアレン生る。トウルゲニエフの「ルデイン」出づ。

一八五六　――「草の葉」の第一改訂增版三八四頁。ヘンリー・ソロー(Henry Thoreau)と相識つた。その外アルコット(Alcott)、詩人ブライアント(Bryant)等とも友達になつた。

三十八歳　ハイネ、スティルナー死す。オスカー・ワイルド、バーナード・ショウ生る。

一八五七　――この年より一八六〇年に至るまで自分の詩を立派に仕上げるために殊に力を盡した。

十月ハリス將軍に謁し對外通商の急を說いて通商條約を謀定した。コムト死す。ボードレールの「惡の華」「フローベルの「マダム・ボヴアリー」出づ。

一八五八――ホーレース・トラウベルがキヤムデンに生れた。詩人の晩年の無二の友であつた。ルモン生る　ウヰリヤム・モリスの詩集、エリオットの「アダム・ビード」等が出た。

一八五九　……ベルグソン生る。「ルバイヤット」出づ。

四十一歳

一八六〇　――「アダムの子等」(Enfans d' Adam)カラマス(Calamus)等二十二の新詠を加へた第二改訂增版が出版された。エマーソン來訪。「アダムの子等」を加へたその書にエマーソンの書簡の一節を掲載したので、エマースンは可なり迷惑したやうに見える。エリドリッヂ(C. W. Eldridge)オ・コンナー(W. D. O'Conner)バック(Dr. R.M. Bucke)等と知つた。バックは特色のある詩人の友達であり、且つ詩人の興味ある傳記者として知られてゐる。

リンカーン大統領となる。首府を江戸に移す。五條の御誓文。

四十二歳　ショーペンハウエル死す。チエホフ生る。スペンサーの「綜合哲學體系」出づ。

一八六一――第二增版を出してから此年までは詩作を忘れたやうに、退職海員の世話に沒頭してゐ

た。

「この日、この時、私は純潔で、完全で、おだやかで、淨い血を持つた雄々しい肉體を持つべく決心した。水と純粹な牛乳の外は凡ての飲料を避け、凡ての油氣の多い肉や晩い夜食を禁ずることによつて、淨化され、淸められ、精神化され、力づけられた肉體を」……四月十六日の日記より。而して彼はこの言明に背かなかつたやうに見える。

エリザベス・ブラウニング死す。

四十三歳 **一八六二** ―南北戰爭に出征した弟ヂョーヂが戰場で負傷したといふ急報に接し、凡てを拋つて南向した。弟の負傷は幸に重いものではなかつた。然し一度戰場の悲慘な樣子を目擊した彼れは、惻隱の情に堪えず、自ら進んでワシントンにあつて病院の看護人となつた。その時の消息は「傷をつゝむ人」(Wound Dresser)に委しく記されてゐる。彼れの看護生活は前後二十ケ月の長きに亘り、その間、病院に訪れたこと六百度、傷病兵を看護すること八萬人から十萬人の間にあつた。その奉仕生活が餘りに激しかつた爲め、さすがに健全無比だつた彼れの肉體も衰へて來た。

ソロー死す。ウーランド死す。メッターリンク、ハウプトマン生る。ユーゴーの「レ・ミゼラブル」

ルナンの「耶蘇傳」出づ。

ビスマーク、プルシアの宰相となる。

四十四歳 **一八六三** ―十月ブルックリンに歸つて母を省した。詩作に歸らうかとの衝動を感じた。十二月再ワシントンに戻つた。

リンカーンが奴隸廢止令を公布した。

リンカーンがワルトの歩いてゐるのを遠くから見て "Well, he looks like a man" といつたのは此の頃の事だらう。

ヘッベル、ドラクロア死す。テーヌの「英文學史」出づ。

四十五歳 **一八六四** ―この六月頃から健康を害して中風の氣味になつた。

ラアザール死す。

四十六歳 **一八六五** ―病院の仕事も以前のやうにはできぱきとは出來なくなつた。オ・コンナーなぞの世話で內務省の印度人局の書記に傭はれ、オ・コンナーの家庭に客となり、或はヂョン・バーロース(John Burroughs)などと往來して樂しい日を送つた。ピーター・ドイル(Peter Doyle)と知つたのもこ

の年のことである。芭蕉の杜國に於けるが如く彼れはドイルを愛した。但しドイルは南軍の一兵士で、心が極めて素朴で美しかつた外には、文筆などの嗜みはなかつた。

「草の葉」の著者といふ科で免職された。オ●コンナーがその處置に憤慨して "The Good Grey Poet: A Vindication" を著はした。アッシトン(J. H. Ashton)が詩人の爲めに大藏省に書記の位置を得てやつた。年收千六百弗。

イエツ、キップリング、アーサー●シモンズ生る。ワグナーの「トリスタンとイソルデ」、イブセンの「ブランド」出づ。

四十七歳

一八六六 ―"Drum Taps" が單行本になつて現はれた。

四月十五日リンカーンが暗殺された。この時ワルトはブルックリンに母を省してゐて、共に悲歎に暮れた。

四十八歳

一八六七 ―"Drum Taps" を加へた「草の葉」の第三改訂增版が出た。

英國に於てもこの詩人を認めるものが漸次增加し、サイモンズ(John Addington Symonds)、ドーデン(Edward Dowden)、スウキンバーン(Algernon Charles Swinburne)、ロゼッテイ(W. U. Rossetti)等が好意を寄せた。

ボードレール、テオドル●ルーソーが死んだ。イブセンの「ピヤ●ギント」出づ。

四十九歳

一八六八 ―ロゼッテイの盡力で「草の葉」の選集が英國で出版された。この年からギルクリスト女史(Mrs. Anne Gilchrist)との交通が始つた。ギルクリスト女史は當時四十二歳の寡婦で亡夫の遺業を繼いでブレーク傳を大成した人だが、ワルトに於て聖書に等しい崇高な思想を語る一箇の男性を見出した。"An Englishwoman's Estimation of Walt Whitman" を見よ。

詩人はかくの如く諸方からの承認を受けながら、その頃深い孤獨の寂寥に惱んでゐたやうに見える。

明治元年。ゴーリキー、ロマン●ローラン生る。ドストイエヴスキーの「白痴」出づ。

一八六九 ―ラ●マルテーヌ死す。ヴエルレーヌの「華やかな變宴」、ストリンドベルヒの「自由思想家」出づ。

五十二歳

一八七〇 ―ギリスの「地上樂園」、エマーソンの「社會と孤獨」出づ。

一八七一 ―テニスン(Alfred Tennyson)から懇切な消息が來た。スウキンバーンが "Song before

"Sunrise" なる詩集中に "To Walt Whitman in America" といふ熱情的な讃美の詩を書いてゐる。

「印度への旅程」(Passage to India)を加へた詩集第四改訂增版が出た。「民衆の視野」Democratic Vistas)が公けにされた。

ヂョン・ボロースのホキツトマン評傳 Notes on Walt Whitman)が出た。

ゾラの「ルーゴン・マカール」、ダンテ、ロゼッティの第一詩集が出た。

五十三歳

一八七二——「自由な翼を張れる強い鳥のやうに」(As a strong Bird on Pinions free) 成る。ダートマス學院 (Dartmouth college, Hanover) の卒業講演に現はれた。その講演の自畫自讚をワシントンの新聞に豫め投書しておいたが、滑稽なことには沒書になる。

グリルパッツア死す。ヱーツエの「悲劇の誕生」出つ。

五十四歳

一八七三——ルドルフ・シュミツド(Rudolf Schmidt)が「民衆の視野」を獨譯したについて、ワルトに寄せた手紙の中に、ビヨルンソンが云つたといふ言葉が載せてある。"Walt Whitman makes me a joy as no new man in many years, and in one respect the greatest I ever had"

此年一月二十三日局部的な中風症を發し、第一次の遺書を作つた。職を退いて海岸に靜養する爲め北方への旅に上つたが、費府で病が重つたので、そのまゝ弟のヂョーヂが住んでゐるカムデン (Camden) に行つて、その家に寄寓することになつた。それ以來カムデンは死に至るまで詩人の幽棲の地となつた。

五月二十三日母が死んだ。

オ・コンナーとの不理解が生じ、ワシントンでの友等は散じ、貧と病とが共に詩人を窮迫したけれども、彼れは太陽の如く獨り曖かに心を保つた。

ギルクリスト女史が英國から渡米して世話をしたいと申出てたがそれを拒んだ。

トルストイの「アンナ・カレニナ」出つ。

岩倉大使等が歐米の視察から歸朝した。

五十五歳

一八七四——再び詩作に歸つた。"Prayer of Columbus" "Song of the Universal" "Song of the Bed Wood Tree" 等。

サイモンズの「伊太利及希臘紀行」が出た。

讀賣新聞が新聞紙の嚆矢として發刊された。

五十七歳

一八七六――「草の葉」の第五改訂增版が出た。英國の友、ロゼッテイ、ホウトン、ドウデン、ギルクリスト夫人、カーペンター(Edward Carpenter)、テニスン、ラスキン(John Ruskin)、スコット(Walter Scott)、ゴス(Edmund Gosse)、セインツベリー(Saintsberry)、ブラオン(Madox Brown)等が詩人の窮乏を聞いて醵金してくれた。

ワルトはスタツフオード家と懇親になり、折々その家庭を訪れ、又その近傍なるテインバー・クリーク(Tinbar Creek)に行つて自然と親んだ。彼れの自然との接近はこの頃から復た繁くなつた。

ギルクリスト女史が英國から費府に移住して來た。女史の詩人に對する尊敬は戀にまで變つた。而して結婚を申出た。けれども詩人はこれを避け、一八七九年女史が歸英の時まで折々その家を訪れて深い友誼的な交際を續けた。

マラルメ「牧神の書」、トウルゲニエフの「處女地」、ワグナーの「ニーベルンゲン・リード」等が出た。

五十八歳

一八七七――五月カーペンターが英國から訪ねて來た。カナダの醫師バツクも詩人を訪問した。爾

來バツクはワルトの綿密な觀察者であり、相談相手であり、旅行の伴侶でもあつた。

クルベー死す。イブセンの「社界の柱石」。

六十歳

一八七九――紐育に行き、リンカーンの追悼講演をなし得る位健康を回復した。

ドーミエ死す。イブセンの「人形の家」、ストリンベルヒの「赤い部屋」出づ。

六十一歳

一八八〇――バツクの客となりカナダに行く。

エリオツト、フローベル死す。

六十二歳

一八八一――四月にボストンに行きロングフエローによつて歡待された。ミレー展覽會を見「種蒔き」「水飼ひ」「農人の休息」「アンヂエラス」などの傑作に接して感嘆した。

四十年にして始めてウエスト・ヒルスを訪れた又コンコードに行き落日の如きエマーソンと會見した。

ドストイエヴスキー死す。アナトール・フランスの「シルヴエストル・ボナールの罪」出づ。

カーライル死す。大統領ガーフキールド暗殺さる。

十一月カムデンに歸る。「草の葉」第六改訂增版が出た。

六十三歳 **一八八二**——ボストンの檢事局が「草の葉」の發賣を州内に於て禁止した。書肆が「一人の女が私を待つてゐる」(A Woman waits for me)「名もなき淫賣婦に」(To a Common Prostitute)を削除したらと勸めたけれども、斷乎として應じなかつた。

エマソンとロングフエローとが死んだ。

「美しい男、自分自身の上に立脚し、凡てを愛し、凡てを抱擁し、而して太陽の如く健かで朗らか」……エマソンを評した詩人の言葉。秋に「自選日記及び雜纂」(Specimen Days and Collect)が出版された。詩人はこの書についてオ●コンナーに送つた消息の中に云つてゐる「野鴨や雁の習慣を知つてゐるか。さあ、この書物も先づ池の表面をせはしく撫でゝ通つたやうなものだ——私の生活の表面を……本當の廣さは全然觸れられてはゐない。然し平らな小石が飛びはねて行く時、こゝかしこで水面を打つ……そのやうに、少くとも或る生々とした接觸點を殘すにはそれで十分だ」。

ロゼツテイ、ダーウキン死す。トルストイの「懺悔」、ニイチエの「欣ばしき智慧」、ワグナーの「パルシファル」出づ。

六十四歳 **一八八三**——バツクの書いたワルトの傳が出た。

トウルゲニエフ、ワグナー、カール●マルクス死す。モーパツサンの「女の一生」。

六十五歳 **一八八四**——一家をミツクル街(Mickle Street)に構へた。

訪問者ヘンリー●アーヴキング(Henry Irving)、ゴス、アーネスト●リス(Ernest Rys)、カーペンター、ヂョン●モーレー(John Morley)、オスカー●ワイルド(Oscar Wilde)、ウキリヤム●ケネデー(Willi m S. Kennedy)、ロバート●インガソール(Robert Ingersoll)、ホーレース●トラウベル(Horace Traubel)等。

六十六歳 **一八八五**——ギルクリスト夫人逝く。ワルトその子息ハーバートに書を送つていふ「お手紙拜見。今は香ばしく豐かな記憶の外何ものも殘つてはゐない——常に美しい、命のある限り、大地のある限り。今日これ以上の手紙が書けない。私は獨座して考へなければならない」。

ユーゴー、デユマ死す。

六十七歳 **一八八六**——ローウエル死す。ストリンドベルヒの「結婚生活」出づ。

九十六歳 **一八八八**——六月病が重つた。遺言狀を作る。「十一月の枝」November Boughs を出す。

イブセン「海の夫人」、マラルメの詩集出づ。

七十歳

一八八九 ― 幸に病魔は退いたが、彼れの歩行はもう自由でない。家事はマリー・ダヴキス夫人(Mrs. Mary Davis)が司り、世話はワアリー(F. Waren Fritzinger)が之れに當り、黑猫、斑の犬、一羽の鸚鵡とカナリヤ鳥とがその家族だつた。

コンテンポラリー倶樂部(Contemporary Club)でリンカーンに就て最後の講演をした。

ブラウニング死す。ニーチエ發狂、ハウプトマンの「日の出前」、ブルヂエの「弟子」出づ。

七十一歳

一八九〇 ― ヂョン・ヂョンストンが英國から訪ねて來た。その訪問記に當時の詩人の容貌が――多少の誇張はあるが――詳細に述べてある。

ラスキン死す。トルストイの「クロイツエル・ソナタ」、ワイルドの「ドリヤン・グレー」、フランスの「タイス」、メターリンクの「群盲」等が出た。

七十二歳

一八九一 ― "Goodly, my Fancy" といふいさゝかの詩集を出す。十二月十七日風邪から肺炎に變症して、病が頓に重くなつた。醫師が危篤を報じた。バック、ボーロース、ハーネッド(T. B. Harned)等が急に來て枕頭に侍した。

オ・コンナアが死んだ。

ニーチエの「ツアラストラ如是說」出づ。

七十三歳

一八九二 ― 二月病が少康を得た時、諸友と最後の告別をした。

三月二十六日、微雨の降りそゝぐ土曜日の午後、トラウベルの手を執つたまゝ靜かに世を去つた。

越えて三月三十日ハーレイ墓地(Harleigh Cemetery)に豫め造つておいた墓に葬られた。

葬式の日は長閑かな春日であつた。駒鳥の初音が林の中に聞えてゐた。ウキリヤムス(Francis Howard Williams)が孔子、ゴウタマ、基督、コーラン、イザヤ、聖ヂョン、ゼンド・アヴエスタ及びプラトー等から美しい句を朗讀し、ハーネッド、ブリントン(D. G. Brinton)、バック、インガーソール等が追悼の言葉を述べた。會葬者三千。獨り詩人の愛友トイルは演說を聞かうともせず、會衆から離れて孑然と草の上に默座してゐた。

テニソン死す。ハウプトマンの「織匠」等出づ。明治二十五年。第一回帝國議會召集の後二年。

ホヰットマン詩集

顔

一

硝道の上を徒ふ時、或は田舎の小道を馬で乘りまはす時――見よ、樣々な顔又顔、
友誼的な顔、几帳面な、用心深い、慇懃な、理想的な顔、
靈的な豫覺的な顔、――いつ見ても好ましい普通な情け深い顔、
歌はれたる音樂の顔、――法律家、司法官に生れついたやうな、後頭部の頂きが廣い、
物々しい顔、
額のふくれた、獵人や漁夫の顔、――生粹の市民らしい無髯な色白の顔、
純潔で、大袈裟で、憧憬的で、眼狡るやうな藝術家の顔、

うるはしい魂を宿した醜い顔、卑められ、憎まるべき美しい顔、
小兒の神々しい顔、多くの子の母の輝かしい顔、繻の顔、渇仰の顔、
夢見る如き顔、動かぬ巖の如き顔、
善惡共に色にあらはれぬ顔――去勢された顔、
刈込手にその翼を刈込まれた野性の鷹、
去勢者の革紐と鋏とに遂に打まかされた牡馬。

かく、補道の上を彷ふ時、或はやむ時なく出入りのある渡船で川を越す時、顔、而して顔、而して又顔、
私はそれらを見る、而してつぶやくことをせず、凡てに滿足してゐる。

二

それらの顔がその終局の姿だと思つたとしたら、私がそれに滿足してゐられるとあなたは思ふか？
この今の顔は、一人の人間の顔としては餘りに情けない、
或る下劣な寄生蟲が「御免」といひながら――かぢりついてゐる、
或る鼻腐れの蛆蟲が、その孔にもぐりこむのを妨げられないのをいゝことにして、かぢりついてゐる。

この顔は塵芥（ちりあくた）を嗅ぎまはる犬の鼻先きだ。
蛇蝎がその口には巣喰つてゐる――私は齒の間から出す激しい呼氣のやうな脅喝を聞く。

この顏は極洋のそれよりもなほぞく〳〵と人を寒くする靄だ、
その眠たげな所定めぬ氷山は、流れ行くま〻に嚙み合つて鳴る。
これは苦い草本の顏である――これは催吐劑である――それは名札を附する必要はない、
而して人間の顏といふよりは、藥劑棚、阿片、丁幾、ゴム、或は豚脂を思はせる顏である。
この顏は癲癇だ、その言語なき舌は、この世のものとも思はれぬ叫びを發する、
その血管は頸根まで怒脹し、その眼は廻り動いた擧句に白眼だけになる、
その齒は嚙み合ひ、手の平は內側に曲つた指の爪で刺し通される、
その人は十分の意識を持ちながら、泡を吐き、身悶えして、地面の上に打倒れる。
あの顏は害鳥や害蟲のために喰はれてゐる、而してこの顏は半ば鞘を拂つた殺人者の匕首だ。
この顏は寺守りに贈つた恐るべき內密の金で存在を續けてゐる、
小休なき埋葬の鐘がそこには鳴つてゐる。

三

かくてこれらが人間の實際だ――大きな圓るい地球の上にゐる統領と凡人とだ！

私と同じ人間達の顏容(かたち)よ、お前はお前の皺だらけな死色を呈した多數の行進を以て私を欺かうとするのか、

さあ、お前は欺き遂ふすことが出來まいよ。

私はお前の決して失はれない完全な豐かさを見るから。

私はお前の憔れた卑しげな假裝の一皮下を見るから。

思ふまゝに顏をかしげるなり、曲りくねらせろ——魚類や鼠類が前肢を動かし廻はすやうにして、嘲るなら嘲けつて見ろ、

私はお前の口網を取去るから、屹度取去つて見せるから。

私は白痴院にゐるゝものゝ中でも最も汚らしい涎くりの白痴の顏を見た、

而して私は人々が知らないやうな慰藉をそれに對しても持つことが出來た。

私の同胞を虛ろにし、傷けた力について私は知つてゐた。

その同じ力が壞れた住家から塵芥を一掃するために待ち構へてゐるのだ。

而して私は二十かその倍程の時代の先きを見守るだらう、

而してそこに私は、私自身と優劣のない、完全にして損はれない眞の地の司配者とめぐり遇ふだらう。

四

司配者は進出する、而して更らに進出する、

常に暗影を先驅とし——常に行きとゞいた手が後れ勝ちなものを驅り立てつゝ。

司配者のこの顔からは旌旗と軍馬とが現はれ出る――おゝ素晴らしさ！　何が起るか
を私は知る、
私は先驅者の高い帽子を見る――私は疾走者の隊が露拂ひをするのを見る、
私は勝利の鼓聲を聞く。

この顔は救助船である、
この顔は威嚴を持つた有髯の顔で、他の人々の些事を心にかけない、
この顔はいつでも食ふによい香ひある果物だ、
健康で眞面目な青年の顔は凡ての善の約束だ。
これらの顔は、眠つてゐても覺めてゐても、私の言葉を立證する、

彼等は神そのものゝ子孫であるのを示してゐる。
私の言葉に私は責任を持つ、私は除外例を作らない――赤人種でも、白人種でも、黑
人種でも凡て神らしいのだ。
各の家には子宮がある――それは數千年の後に現はれ出る。
窓の汚染（しみ）や龜裂（ひわれ）は私を亂しはしない、
丈け高く完全なものが、その後ろに立つて私に手言葉（てことば）を與へる、
私はそれに約束を讀む、而して忍耐して待つ。

これは盛り咲きの百合の花の顔だ。

彼女は花園の垣根に倚るしなやかな腰つきの男に話しかける、
「おいで」彼女は顔赤らめながら呼びおこす「近くにおいで、しなやかな腰つきの男よ、
私が出來るだけ丈を高くしてあなたに倚りかゝるから、側に立つて、
私を白色の蜜で満たしておくれ、私の方に折れかゞんでおくれ、
あなたの硬い髪で私をこすつておくれ、それを私の胸や肩にこすりつけておくれ」と。

五

夥多の子供を持つ老いた母の顔！
しつ、静かに！　私は存分に満足する！
日曜日の朝、朝靄は静かにおそくまで、

それは木柵のへりの並木の上に低くかゝり、
並木の下のサ、フラスや、野櫻や、猫いばらの上にもかゝる。
私は富んだ貴夫人等が盛装して音樂夜會に臨むのを見た、
私は唱歌者達が長々と歌ふのを聞いた、
誰れが花のやうな若々しさで、白き水泡、紺青の水から跳り出たかを聞いた。
見よ、女を！
彼女はフレンド宗徒風の帽子から顔をのぞかせて――その顔は大空よりも更らに朗ら
かに美しい。

百姓家の、日影になつた廣縁に、彼女は肱かけ椅子に倚る、
太陽は丁度年老いたその白髪の上に照る。
彼女のゆたかな上衣はクリーム色のリンネルだ、
その孫子息達は亞蘇を作り、その孫娘達はそれを紡絲車にかけて紡む。
歌のやうな大地のとゝのひ！
その完成さは哲學の達し得るところではなく、又達しようとの望みすらない。
申分のない人類の母。

大道の歌

一

脚にまかせ、心も輕く、私は大道を濶歩する、
健全に、自由に、世界を眼の前に据ゑて、
私の前の黒褐の一路は、欲するがまゝに私を遠く導いてゆく。
これから私は幸運を求めない——私が幸運そのものだ、
これからもう私はくよ〳〵しない、躊はない、又何者をも要しない、
剛健に飽滿して、私は大道を旅してゆく。

大地――大地は自足してゐる、
私は星座等が更らに近くにあるべき必要を見ない、
私はそれらが極めて正しい所にあるのを知る、
それらに屬するものはそれらに滿足してゐるのを知る。

(然かも私は快い重荷を擔ひつゞけてゆく、
男と女とを私は運ぶ――何所に行くのにもそれを運ぶ。
誓つていふ、私には彼等から遁れる術がない、
私は彼等で一杯だ、その代り彼等も私で一杯にしてやる)

二

汝大道よ、私はお前の上に立つて見廻はして見る――こゝにあるのがお前の凡てゞは
ないのだらう、
眼に見えない多くがなほこゝにはあるのだらう。

茲に深遠な攝取の教訓がある、それは愛憎を絶してゐる、
獸毛のやうな髪毛の黑奴も、極重惡人も、病者も、文盲も退けられはしない、
誕生、醫者への急使、乞食の逍遙、醉ひどれのよろめき、笑ひさゞめく機械工の一團、
若い遁走者、富豪の車馬、めかしや、駈け落ちの男女、
朝市に出る男、葬車、町に運び入れられる家具、町からの歸還者、
それらは通行する――私も亦通行する――如何なるものも通行する――何者も禁制さ

れない、
凡てが攝取される――凡てが私に親しましい。

三

その呼吸によつて私に言葉あらしめる汝空氣よ！
混亂の中から私に意味を喚び起し、それに形を與へるところの汝物象よ！
私と萬有とを平等な麗はしいその大雨（ねほあめ）の中に抱きつゝむ汝光よ！
路の兩側に不規則な凹みを作つて踏みならされた汝小徑よ！
お前達は眼に見えない存在で充滿してゐるらしい――お前達は誠に私に親しましい。
汝、旗に飾られた都會の道々！　汝、曲り角の強い力石よ！

汝、渡船よ！　汝、繋船場（ふつきば）の平板と木柱よ！　汝、その側面の木材よ！　汝、遠くにある船よ！
汝、家々の列なりよ！　汝、窓をちりばめた家の正面よ！　汝、屋根よ！
汝、玄關と入口よ！　汝、冠石と鐵柵よ！
透明なる玻璃によつてさま〴〵の物を人の眼にさらす汝、窓よ！
汝、戸よ而して階段よ！　汝、穹窿（アーチ）よ！
汝、限りなき石疊の灰色なる石よ！　汝、踏みへらされた通行場よ！
お前の手近かにあつた凡てのものから、お前は自身に賦與したと思ふが、今その同じものを私にも竊やかに賦與しようとする、
生きたもの死んだものを問はず、お前はそれでお前の無感覺らしく見える表面を滿たしたやうだが、それらのものゝ靈は私にもよく解り、而して親しむべきものである

だらう。

四

大地は右手にも左手にも擴がり、
その光景は生き、そのどの部分も最上の姿で、
要せられる所に音樂が起り、而して要せられない所には音樂が止む、
公けの大道の快活な聲――大道の華やかな生き〳〵した感覺、
おゝ街道を私は旅する！　おゝ公けの大道！　お前は私にいふか「私を見捨てゝはいけない」
お前はいふか「冒險するな、若しお前が私を見捨てたら、お前は失はれる、」
お前はいふか「私は既に整頓されたのだ――私は十分に踏みならされ十分に認められ

てゐる――だから私に膠着しろ」と。
おゝ公けの大道よ！　私は返答する、私はお前を捨てるのを恐れてはゐない――而かも私はお前を愛するぞよ、
お前は私が私自身を表現するより以上に私を表現する、
お前は私に取つて私の詩以上のものだ。
思ふにあらゆる偉れた行ひは凡て外氣の中に企てられる、而して凡ての偉大な詩歌も亦、
私はこゝに足を止めてゐては奇蹟をなすことが出來ないやうだ。
（私の判斷力、思想は、これからは外氣の中、大道の上で試みる）

大道の上で出遇ふものは、何んでも私の氣に入るだらう、而して私を見るものは誰れでも私を好くだらう。

私が眼をとめる人は誰れでも幸福だらう。

五

今のこの時から、自由！

今のこの時から私は制約や、空想的な境界線から自らを解放することを命ずる、

どこに行かうと、私は全然的に絶對に私自身の主、

他人にも耳傾け、そのいふ所をよく思ひめぐらし、

立停り、探り求め、受け入れ、熟慮しはするが、

しとやかに、然し拒み難い意志を以て、私は私を捕へんとする桎梏から私自身を奪ひ

返すのだ。

私は空間から大氣を吸ひ入れる、

東も西も私のもの、而して北も南も私のものだ。

私は自分で思つてゐた以上に大きく且つ善い、

凡てのものが美しく見える、

私は男の人にも女の人にも繰返していひたい、あなたがたは大層ないゝことをしてくれたから、私も同じだけのことをあなたがたにして上げたいと。

私は歩を移すにつれて、私自身の爲めに、又あなたの爲めに獲得してゆく、

私は進みゆくにつれて私自身を男等と女等との中にふり撒いてゆく、
私は新しい喜びと荒々しさとを彼等の中に押しむける、
誰れが私を退けようと、私はそれを苦にはしない、
誰れかゞ私を迎へ入れるなら、その男の人なり女の人なりは祝福されるだらう、而して私を祝福するだらう。

六

今一千の完全な男が現はれ出たとしても、それは私には不思議ではない、
今一千の美しい姿の女が現はれ出たとするも、それは私には不思議ではない。
今こそ私は最上の人間がどうして作られるかを知つた、
それは外氣の中にあつて、大地の上に食ひ且つ眠ることによつて作られるのだ。
こゝに偉大な個性的の行爲が働く餘地がある、
偉大な行爲は全人類の心を把捉する、
力と意志との流射は法律を轉倒させ、それに反對する凡ての權威と議論とを憫殺する。
こゝに睿智の試定がある、
睿智は徹底的に學校の中で試定され得るものではない、
睿智はそれを持つてゐる人から持つてゐない人に仕送られ得るものではない、
睿智は魂のもので、立證のしようがない、それ自身がその立證だ、
凡ての程度、凡ての物象、凡ての質價に使用されて、滿足するものだ、

それは事物の實在と不滅、及び事物の優秀を證明する、
事物の外形の流轉の中に、魂の中から睿智を呼び覺すべき何者かゞあるのだ。

かくて私はあらゆる哲學及び宗教を吟味する、
それらは講義室でうまく立證されるかも知れないが、而かも高大な雲の下、野外、流るゝ潮の傍らにあつては立證されないかも知れない。

こゝに實現がある、
こゝに共感する人がある——彼れはこゝにあつて、彼れの衷にあるものを實現する。
過去、未來、莊嚴、愛——若しそれらがお前に虛ろなものならば、お前も亦それらに虛ろなものだらう。

凡ての物象の中核のみが養分となる、
お前のために、又私の爲めに外殼を裂き破つてくれる人は何所にゐるのだ、
お前の爲めに、又私の爲めに權謀と束縛とを切り放してくれる人は何所にゐるのだ、
こゝに牽引がある——それは豫め形造られたのではなく——時宜に應じて出來たのだ、
お前が道を行く時、見も知らぬ人に愛せられるとはどんなことだか知つてゐるか。
お前に振り向けられた眼の球の言葉を解することが出來るか。

こゝに魂の流射がある、
魂の流射は問題の種を播き乍ら、木の葉に掩はれた門を潜つて内部から流れ出て來る。
このあこがれ心、それは何故だらう、又それと定めがたいこのそゞろ心、それは何故
だらう、
何故男の人達女の人達が私の側近く來ると、太陽の光が私の血に漲るのだらう、
何故彼等が私を離れると、私の歡びの長旗は細く垂れ下るのだらう、
何故私がその下を歩くごとに、あすこの樹から偉大な、音律的な思想が私の上に降る
のだらう、
(思ふに人はあの樹に夏冬をつるしておいて、私がその下を通るとその木の果を落して
よこすのだ)
私が見ず識らずの人とふと取り交はすそのものは何んだ、

御者の側近く坐つてゐる時、その御者と取りかはすそのものは何んだ、
私が行きずりに立ち停つて見る、引網を引く漁師と取り交はすそのものは何んだ、
私が自由に女なり男なりの好意を受入れるのは何がさせる業だ、又私の好意を彼等が
受入れるのは何がさせる業だ。

八

魂の流射は幸福だ——こゝに幸福がある、
思ふにそれは外氣の中に遍漫し、常に人を待ちかまへてゐる、
今それが私達にそゝぎ入つた——私達は正しく滿たされた、
こゝに無礙な愛着的な性格は生ずるのだ、
無礙な愛着的な性格こそは男なり女なりを生きゝとし、香ひやかにする、

（朝の若草は毎日その根から生き〳〵と香ひやかに萌え出るけれども、性格が生き〳〵と香ひやかに夫れ自身から萌え出る姿には及ばない）

無礙な愛着的な性格に向つて老少の差なく愛の汗は流れ出る、
かゝる性格から美や修練を憫殺すべきチヤームが蒸餾されて滴り落ちる、
かゝる性格の方に戰慄し熱欲する接觸の悶えが高まる。

九

さあ行かう！　お前が誰れであらうと、私と一緒に旅しておいで！
私と一緒に旅する以上、お前は決してお前を倦まさないものを見出すのだ。

大地は決して倦まさない、
大地は一見荒つぽくて、沈默で、依態が解らない——自然は凡て一見荒つぽくて依態が解らないものだ、
失望してはいけない——我慢しろ——十分被はれてはゐるが、そこには神聖なものがある、
誓つていふが、そこには言葉にはいひ盡せない程美しい神聖なものがあるのだ。

さあ行かう！　私達はこゝに停つてはゐられない！
商品の一杯なこれらの店がどれ程心を牽くとも——どれ程この住居が重寶でも、私達はこゝにゐ殘つてゐる譯にはゆかない、
此港が何程安全でも、そこの水が何程穩かでも、私達は碇を下ろしてゐてはならない。

私達の周圍がどれ程旅人に親切でも、私達はたゞ束の間だけその親切を受けることを許されるのだ。

一〇

さあ行かう！　誘引は更らに大きいだらう！

私達は水路もない荒海を航海するのだ、

私達は、風が吹き、波が騒ぎ、ヤンキーの快走船が一杯に帆を張つて走つてゐる遙かな所に行くのだ。

さあ行かう！　力、自由、大地、元素と共に！

健康、不羈、快活、自尊、好奇、

さあ行かう！　凡ての形式から！

貴様達の形式から、おゝ蝙蝠の眼をした物質主義の僧侶達よ！

無益な死骸が道を塞ぐ――葬りのいとまもない。

さあ行かう！　然し警戒を聞け！

私と一緒に旅するものには最上の血液と、筋骨と、忍耐とが要せられるのだ、

男でも女でも勇氣と健康とを持ち合はさないなら、私の道に來ることは出來ぬ。

若しお前がお前の最上のものを既に浪費してゐるのなら、こゝには來るな、

唯香ひやかな雄々しい肉體を持つたものゝみが來ることが出來るのだ、

病人は駄目だ――酒に耽けるもの、黴毒を病むものはこゝには許されぬのだ。

私と私の仲間とは議論や、比喩や、小説で説伏し合ふのではない、
私達は自分自身の存在で説伏し合ふのだ。

一一

聞け！　私は眞劍でお前と話す、
私は古びたすべつこい賞與を提供するのではない、然し荒々しい新しい賞與をだ、
その賞與といふのはお前に來るべき毎日をいふのだ。
お前は世にいふ富を積み上げることはしまい、

お前は浪費的な手でお前の得たもの成就したものの凡てを撒き散らすだらう、
お前の眼あてにしてゐた都市に到着するや否や――お前が滿足して腰を落着けるや否
や、そこを立去るべく拒みがたい招きを受けねばならぬ。
お前は後にゐ残る人達から皮肉な微笑や嘲罵を浴びせられるだらう、
どれ程切な招きを受けようとも、お前は唯別離の熱い接吻を以て酬ゆる外はない、
お前はお前の方に兩手を擴げて引留めようとする人々の抱擁を許してはならない。

一二

さあ行かう！　偉大なる道伴れ達の方へ！　而してその人達に仲間入りするために！
彼等も大道の上にあるのだ！　彼等は敏捷な堂々たる男達だ！　彼等は最も偉大な女
達だ！

彼等を妨げるものを乘越えて――彼等を引きとめるものを振りすてゝ――大となく小となく障碍物をあとにして、乘り越えてゆく、

罪惡を遂げた人も、多くの美德を遂げた人も、

穩やかな海を樂しむ人も、嵐の海を樂しむ人も、

多くの船を操つた人も、遠くの道を歩いた人も、

多くの國々の住人、遠い住居の人々、

男を信じ女を信ずる人、都市の觀察者、孤獨な勞役人、

叢、花卉、汀の貝類に足を停めて考へる人、

婚禮の舞踏の舞踏者、花嫁を接吻する人、子供達のやさしい保護者、子を生む人、

叛逆軍の兵士、まだ埋めない墓穴の側に佇む人、死棺を垂れ下ろす人、

季節定めず幾年も旅する人――不思議な月日、それはその前行の月日から現はれ出る。

謂はゞ道伴れを持つて旅する人、その道伴れとは彼れ自身の種々な一生の姿なのだ、

卽ち、

包藏されてまだ實現しない嬰兒期から進み出るもの、

青春を道伴れに旅するもの、――有髯の强健な成年期を道伴れに旅するもの、

滿ち足りた、無類な、充足した女盛りを道伴れに旅するもの、

男女にかゝはらず、彼等自身の崇高な老年期と共に旅するもの、

老年期、それは宇宙の誇りがな廣さほどに落着いて、成長して、廣々とした、

老年期、近づき來る甘美な死の自由さを以て、自由に振舞ふ老年期と共に旅するものも。

一三

さあ行かう！　無始であるが如く、無終である所へ、
晝の彷徨といはず、夜の休息といはず、凡ての經驗を得るために、
旅行の間に、そこに起る凡てのもの、そこに起る晝をも夜をも旅に溶かしこむため
に、
更らにそれらのものをより高い旅に溶かしこむために、如何なる所でもお前が達して
更らにその先きに進むことの出來ない所は一つもないのを知るために、
如何に遠い未來であれ、お前がそれに達して更らにその先きに進むことの出來ない時
といふものゝないことを感得するために、
如何なる大道でもお前のために横はり且つ待つてゐない大道はないのを見やり見かへ

るために、——如何に遠くとも大道はお前のために横はり且つ待つてゐる、
如何なる存在でも、神のでも、その外の存在でも、お前が達し得ない存在はないのを
知るために、
如何なる所有物でもお前の所有し得ないものはないのを知るために——勞役せず買收
せずして凡てを樂しみ——盛宴だけは除外するが、といつてその一つだも除外する
ことなく、
農人の農圃と、富豪の閑莊との最上のものを獲得し、よい夫婦の清潔な祝福を獲得し、
果樹園の果物と花園の花とを獲得し、
お前が過ぎり行く都會から必要にまかせて獲得し、
お前が出遇つたどこでもの建築物と街路とを後々までも持ち續け、
お前がめぐり遇つた人々の頭腦からはその思ひを——その人々の心臟からはその愛を

集め、
お前の愛人を路上の道伴れとし、而かもその愛人を後ろに殘し、
宇宙そのものが一つの大道であり――多くの大道であり――旅び行く魂に取つての大道であるのを知るために。

一四

魂は旅して行く、
肉體は魂ほど遠く旅しはしない、
肉體も丁度魂ほど大きな仕事をし、遂に魂に旅させるために離れ去つてゆく。
魂の旅のためには凡てのものが離れ去る、

凡ての宗教、凡ての堅固な物象、藝術、政府、――この地球といはず、凡ての星體の上にありしもの、今あるものは、宇宙の莊嚴な大道をゆく魂の行列の前には、悉く物蔭、片隅に隱れ去つてしまふ。
宇宙の莊嚴な大道を行く男と女との魂の行進からいふと、他の一切の行進は附屬的に必要な象徴で養分であるに過ぎない。
どこまでも生き〳〵と、どこまでも前方に、
莊嚴に、嚴肅に、悲痛に、隱れて、退けられて、狂ほしく、混亂して、虚弱に、不滿足に、
捨鉢に、誇りがに、愛でたげに、惱ましく、或は人に受け入れられ、或は人に退けら

れ、

人は行く！　人は行く！　私は人々が行くのを知つてゐる、然し何所に彼等が行くの
かを知らない、
けれども彼等が最上へ、――何か偉大なものゝ方へ行くのだとは知つてゐる。

一五

さあ行かう！　お前が誰れであらうと！　出ておいで！
お前は家の中に眠つたり、ふざけたりして、逗つてゐてはならない、その家はお前が
建てたものでも、お前のために建てられたものであつても、
さあ行かう！　暗い籠居から！
反抗したところが無駄なことだ――私は凡てを知つてゐる、而してそれを發くのだ。

見よ、餘の人と同様に醜悪なお前の中に、
人々の笑ひと、舞踏と、馳走と、食事との中に、
衣裝や裝飾品の内部に、洗ひたてゝ撫でつけた顏の裏側に、
見よ、祕密な、沈默した厭忌と絶望とを。

如何なる良人も、妻も、友も告白の聽手たる信用をおくことが出來ない、
第二の我れ、即ち各人の複己が、告白すべきことをこそ〳〵と祕密にして暮してゐる、
都會の街路を姿もなく言葉もなく、客間では禮裝正しく慇懃に、
汽車の中でも、汽船の中でも、公衆の集會の中でも禮儀正しく慇懃に、
男と女とが銘々の家庭に歸つても、食卓でも、寢室でも、何所でも、

氣のきいた身なりをして、顏附きはにこやかに、姿勢はしやんとして、而かも胸骨の
下には死を、頭骨の下には地獄を、
禮服と手袋とに身を裝ひ、リボンと造花とに身を飾り、
習慣には見事にばつを合せながら、第二の我れについては片句をも發しない。
顧みて他はいひながら、然し第二の我れそのものについては決して。

一六

さあ行かう！　苦鬪をし、奮戰をして、
既に名ざされた目的は復た取消すことが出來ないのだ。
過去に於ての苦鬪は成功したか、

何が成功したか、お前がか、お前の國民がか、自然がか、
今、よく私を理解してくれ——凡そ成功の結果から、その事柄が何んであれ、更らに
大なる苦鬪を必要とする何事かゞ生れ出るにちがひないのは、物事の本質に備はつ
てゐることなのだ。
私の招きは戰鬪への招きだ——私は本氣で叛逆を敎唆する、
私と一緒に行くその人は、滿足に武裝して行かねばならぬ、
私と一緒に行くその人は、足らはぬ勝ちな糧食と、貧困と、怒れる敵と、反り忠とに
度々遇ふのだ。

一七

さあ行かう！　大道は私達の前にある！
そこは安全だ――私は歩いて見たのだ――私のこの足が十分に試みたのだ。

さあ行かう！　躊躇するな！
書かないまゝに紙なぞは机の上に置いておけ、書物は本棚に開かずにしまひこめ！
工具は工場に、金は儲けずにほつたらかしておけ、
學校にも近づくな、教師の言葉には耳を藉すな！
僧侶には講壇から勝手に説教をさせろ！　狀師には法廷で勝手に論じさせ、法官には
　勝手に法をひねくらせておけ！

わが子よ！　私はお前に私の手を與へる！

金よりは少し貴い私の愛をお前に與へる！
説教や法令の代りに私はお前に私自身を與へる！
お前もお前自身を私にくれないか、而して一緒に旅に出ないか、生きてゐる限り、お
　互にしつかり依頼し合ひながら。

ブルックリン渡船場を横ぎりて

一

眼の下の潮の流れ！　私はお前をまともに眺め見る、
西にある雲！　半晌の後に沈むべき太陽！　私はお前をもまともに眺め見る。
普段どほりな服装をした男女の群！　あなた方は何んと不思議に私の眼に映るよ！
渡船場を、幾百又幾百と船越えして家路に就く、そのあなた方は、自分で想像する以
上に私に取つては不思議だ、
而して何年かの後に、岸から岸へと渡つて行く人達、その人達は自分が想像する以上
それを默想する私に取つては不思議だ。

二

凡ての「物」及び凡ての「時」からの形なき營養、
單純な、目のつんだ、脈絡のある計畫――私自身はそれから分立して、凡ての人が分
立して、而かもその計畫の一部分、
過去にあつた凡ての似寄り、而して未來にあるべきそれ、
榮光は私の細微な視象にも聽音にも飾り玉の如く繫がり――街頭の路上にも、渡船場
の行きかひにも、
潮は疾く流れて、私と共に遠く漂ひ去りつゝ、
私の後に現はれ出る人々、その人々と私とを繫ぐ因緣、
その人々の必然さ――その人々の生命、愛欲、視る力、聽く力。

その人々も渡船場の木戸をくぐり、岸から岸へと船越えするだらう、
その人々も潮の流れを眺め見るだらう、
その人々もマンハタンを北に西に船の行くのを見、ブルックリンの丘陵を南と東に見
やるだらう、
その人々は大きな小さな島々をも見るだらう、
五十年の後、人々は渡船の時、それらのものを見るだらう、半晌の後に沈むべき日の
光で、
百年の後、而してなほ數十百年の後、他の人々がそれらのものを見るだらう。
日沒、滿ち來る上潮、海へと流れ歸る干潮を樂しみ見るだらう。

三

「時」も「所」も妨げにはならない——距りは妨げにはならない、
或時代の男よ女よ、而して更らに幾時代も後の男と女よ、私はあなた方と一緒にゐる。
私は私自身を放射する——私は又歸つて行く——私はあなた方と一緒にゐる。而して
凡てを知つてゐる。
あなた方が空と海とを眺めて感ずる、その通りを私も感じたのだ、
あなた方の誰れもが雜閙する群衆の一人である、そのやうに私も群衆の一人だつたの
だ、
あなた方が河の喜びとその輝かしい流れとによつて生氣を取返す、そのやうに私も生
氣を取返したのだ、
あなた方が立つて欄に倚り、而かも速かな水の流れと共に急ぎ流れる、そのやうに私

も立つて、而かも急ぎ流れたのだ、
あなた方が、無數の檣と、込み合つて立つ蒸汽船の煙突とを見やる、そのやうに私も
見やつたのだ。

私も亦幾度となく、半晌の後に沈むべき日をうけて、この河を船越えした、
私は十二月の海鳥を見やつた——彼等が大空に高く、その胴體を微動させながら、翼
は延ばしたまゝ飛び流れるのを見た、
黄色い光がきら〳〵とその鳥類の脊(せびら)をかゞやかし、その餘の部分を深い陰影の中にお
いたのを見た、
私はゆるやかに描かれる輪を見た、而してそれが南の方へと遠ざかつてゆくのを、
私も亦夏の空の水に落ち映るのを見た、

陽の光の水にひく反射でこの眼はまぶしくされた、
日にかゞやく水の中に、私の頭の形が映つて、それから遠心的に麗はしい光輪の放射
されるのを見た、
南、西南の丘々に晴れ霞のいざよふのを見た、
紫に彩られた鱗雲(うろこぐも)となつて水蒸氣の流れるのを見た、
灣の下の方を眺めやつて、入船の數々にも注意を向けた、
その近づくのを、而してその上に私の親しましい人々のゐるのを見た、
大小の帆船の白布の帆を見た——錨を下ろした船をも見た、
帆綱に倚つて働く水夫、横桁にまたがつていそしむ水夫、
丸い帆柱、ふらり〳〵と搖れる船體、蛇體のやうな細々とした長旒、
活動する大小の汽艇、水先案内所にゐる水先案内者、

船のあとに殘る白い澪路、船輪のいそがしく震へを帶びた回轉、
各國の船旗、日沒時にそれを取卸ろす樣、
海扇形の夕波の穗、〔*すくひあげた盃〕光に戯れる波頭、
おぼろ〳〵になりゆく陸續き、船梁の傍らなる灰色花崗石の倉庫の壁、
河の上には影まつた群れ、だるま船の側に、繋ひ合つた大きな引船蒸汽船——乾草を
積んだ舟、おそく還つた艀船、
もよりの岸には、煉鐵所の煙突から出る火が物々しく燃えて夜を催ふし、
狂暴な紅と黄との火光に反映して、黑影のひらめきが、家々の頂、町々の峽に放げ
かけられてゐる、それを私は見たのだ。

四

これら、而してその他の凡ては、私に取つても、あなた方に取つてと同じだつた、
私はこのことをあなた方に告げる爲めに、一瞬時、私自身を放射する——私はまた歸
つて行く。

私はこの町々を殊愛した、
私はこの重々しく、流れ早き河を殊愛した、
私の見た男女は凡て私に親しましいものだつた、
その他の人々も同樣だ——私が豫見するが如くに、私を回想する他の人々、
(時はやがて來るだらう、縱令私はこの日この夜、こゝに足を停めてしまふとしても)

何んだ、それなら、お互ひの隔りは？
お互ひの間にはさまる何十年、何百年のその隔りが何になる？
それが何んであらうと、妨げにはならない——距りは妨げにはならない、而しも「所」も妨げにはならない。

六

私も亦生きた——豊かな丘陵を持つたブルックリンは私のものだ、
私も亦マンハタンの町々を訪ひ、その岸邊の水に身を浸した、
私も亦、不思議な思ひがけない疑問が心を搖がすのを感じた、
白晝群集する人々の間にあつて、その疑問は私を襲つた、
夜おそく家路に就く時、或は寢床に横はる時、その疑問は私を襲つた。

黑い暗翳の蔽ひかゝるのはあなた方の上ばかりではない、
その暗翳は黑く私の上にも蔽ひかゝつたのだ、
私がなし遂げた最上のものも、疑はしく甲斐ないものに見えた、
私の偉大な思想、と自分で思つたものも、眞實にやくざなものではなかつたか？　人
人の哂ひに値するものではなかつたか？

七

惡が何であるかを知つてゐるのはあなたばかりではない、
惡が何んであるかを知つてゐた彼れは私だ、
私も亦自己矛盾といふ古い謎に迷ひ入つたのだ、

無駄口をきゝ、赤面し、怨言を連ね、僞り、盜み、恨みを抱き、
僞りのたくらみ、憤怒、淫心、口にもし得ない熱した慾念を持つてゐた、
旋毛曲りで、から威張りで、慾深かで、淺薄で、惡賢くて、臆病で、害心のあるもの
だつた。
猿も、蛇も、豚も、私の心の中に缺けてはゐなかつた、
欺瞞の眼附き、出鱈目な言葉、好色の思ひ、それも缺けてはゐなかつた、
拒絶、憎惡、延滯、卑陋、怠惰、それらの一つも缺けてはゐなかつた。

八

けれども私は、人なつこく誇り高いマンハタンの住民だつた！
私が近づき或は過ぎるのを見ると、若い人々は高い朗らかな聲を擧げて、最も親密な

名で私を呼んだ、
立ち停る時、私の頭は彼等の腕を感じ、座につく時、私に對して彼等の肉體の無頓着
な倚りかゝりを感じた、
街の中、渡船の上、集會の席で、一語を交はす機會さへなかつたが、私は愛する者の
數多くを見出した、
私は他の人々と同じ生活を生きた、誰れでもする笑ひ、齒がみ、眠り、
俳優や女優に思ひ出されるやうな役目を演じた、
誰れでもが演ずる役目、それは私達が思ふまゝになし得られる、思ふまゝに大きくで
も、
思ふまゝに小さくでも、又は大小を同時に兼ねてゞも。

九

更らに私はあなた方に近づかう、
どんな思ひをあなた方が私に對して持たうとも、それだけの思ひを私もあなた方に對して持つてゐた——私は豫めそれを貯へてゐた、
あなた方が生れる遙か以前から、私は長く眞向目にあなた方のことを考へてゐたのだ。
何を私が身にしみ〴〵と感ぜねばならなかつたかを誰れが知り得よう？
私がこの事を樂しみ味つてゐるのを誰が知り得よう？
あなた方は私を見ないにもかゝはらず、私は今あなた方を見てゐるのだ、それを誰れが知り得よう。
あなた方ばかりではない、私ばかりではない、

少數の民族だけではない、いくらかの時代だけでもない、若干の世紀だけでもない、
凡ての人が時宜にかなつた流射から、凡てのものに共通な中心から來たのであり、來るのであり、來ることであらう。
而してそれが全體の一分子となるのだ、
あらゆるものが指し示す、——最微なものも、最大なものも、——
ある必要な被膜が凡てを包圍する、而して魂をも適當な時機の來るまで包圍する。

一〇

今、檣の林立するわがマンハタン以上に、
わが河、わが日沒、海扇形の上潮の波の穂、

胴體を微動しながら翔りゆく海鷗、薄暮の光の中にある乾草船、而しておそく還つて來た艀船、それ以上に素晴らしく驚くべき盛觀が他にあり得るかを私は訝かる、

如何なる神が、私の手を握り、而して私が近づくや、逸早くも高い聲で最も親しい名で私を呼びかける、あの好ましい聲の持主に及び得るかを私は訝かる、

私の顏を見入る男や女に私を結びつける因緣、それ以外に如何なるものが更らに微妙であるかを私は訝かる、

その因緣こそは、今、私をあなた方に融かし込み、私の意味するところをあなた方にそゝぎ入れるのだ。

お互ひは理解したね、さうではないか？

特別な説明もせず、私が約束したものをあなた方は受け入れなかつたか？

學問が教へ得ないもの——説教が成就し得ないもの、それが今成就される、さうではないか？

讀書では到底現はれ得なかつたもの、それが私一個によつて現はれ出る、さうではないか？

一一

流れよ、河よ！　上潮と共に滿ち、干潮と共に干け！

戯れ行け、海扇形の冠を持つた波頭、

華やかな落日の雲！　お前の榮光もて私をひた濡らせ！　或は私の後に來る幾時代もの男と女とを、

岸から岸へと船越えせよ、往來の無數の群れよ！
直立せよマンハタンの高き檣！　起ち上れ、美しきブルツクリンの丘、
鼓動せよ、且つ迷ひ且つ訝かる頭腦よ！　問ひと答へとを連發せよ！
こゝといはず、彼所といはず、無盡劫な解決の流れをせき止めよ！
人なつこく餓ゑたる眼よ、家の中、町、集會の席を熟視せよ、
呼び響かせよ、若き人々の聲よ！　高々と美しく、最も親密な名で私を呼べ！
生きよ、なじみ深い生命よ！　俳優や女優に思ひ出されるやうな役目を演じろ！　その
の人の思ひのまゝに、大きくもなり小さくもなるその役目を！
思へ、この詩を口ずさむ人々よ、私が人知れずあなた方を見守つてはゐないかを、

河沿ひの欄よ、何心なくそれに倚りかゝり、而かも疾き流れと共に急ぎゆく人々を堅
固に支へよ、
翔りゆけ海鳥よ！　横ざまに、又は大空高く大きな輪を描いて翔り飛べ、
夏の空を映せる水よ！　お前のその空色を、見おろす人の眼が受入れるまで、大事に
それを保つてゐろ、
麗はしい光輪よ、日に照らされた水の中に映る私の頭の形、又は凡ての人の頭の形の
まはりに放射ろ、

近づいて來い船よ、灣の口から！　行き交ひせよ、白帆の船よ、小船よ、艀船よ、
飜れ各國の船旗！　日沒には型の如く取卸されろ、
煉鐵所の煙突よ、お前の火を高々と燃え上らせろ！　暗い影を夜に投げろ！　紅い

光、黄色い光を家々の頂にかゞやかせ、

現象よ、今、而して今から、お前が何んであるかを指し示せ、

汝、必要な被膜、魂を堅く包圍しつゞけろ、

私の爲めに、私の肉體のまはりには、あなた方の爲めに、あなた方の肉體のまはりには最も神聖な香料をかゝげつるせ、

榮えよ町々よ！　お前の船荷とお前の裝ひを現はせ、豐かにも滿ち足りた河よ、

何者もより靈的であり得ぬ存在よ、擴大せよ。

何者もより永續的であり得ぬ物象よ、その立場を守れよ。

一二

私達はお前並びに凡てのものゝ上に降る——私達はお前のすべてを捕へる、

忠實なる固體と液體、お前によつてのみ私達は魂を實現する、

お前を緣にして、色も、形も、位置も、莊嚴さも、神々しさも、

お前を緣にして、凡ての證明と比較、而して私達自身の凡ての示唆と決定。

お前は待つてゐた、お前は常に待つてゐる、物いひ得ぬ美しい使はれ者よ！　新發智よ！

私達は遂にお前を自由な感覺で受入れ、これからは飽くことを知るまい、

最早お前は私達をたぶらかし得まい、私達に抵抗することが出來まい、

私達はお前を役に立てる、而してお前を放棄しない——私達はとことはにお前を心の

中に移し植ゑる、
私達はお前を計量しはしない――私達はお前を愛する――お前の中にも亦完全さが備つてゐるのだ。
お前は永遠に對してお前の役目を準備する、
大なり、小なり、お前は魂に對してお前の役目を準備する。

ワルト・ホヰットマンの警告

諸州の凡てに、或はその一つに、或は諸州の都市に、――「強く抵抗せよ、服從するな」
一度無條件の服從をしたら、一度奴隷になり切つたら、
一度奴隷になり切つたら、この地上の如何なる國民も、州も、都市も、二度と自由を取り返すことは斷じて出來ないのだから。

結局私は何んだ

結局私は一人の子供ではないか、自分自身の名前の響きを繰返し、繰返して喜んでゐる、
私は離れて立つてそれを聞く――いつまでも倦きない、
あなたも亦あなたの名を。
あなたの名前の響きには、二つ三つ以上の發音はないと思つてはゐなかつたのか。

私の手を握る君が誰れであらうと

私の手を握る君が誰れであらうと、
この一大事を忽(ゆるが)せにしては何の甲斐もない。
君が更らに私を試みる前によく云つて聽かすが、
私は君が想像するやうなものではない、遙かに違つたものだ。
私の追隨者であらうとするとその人は何者だ。
自ら進んで私の愛欲の的とならうとするその人は何物だ。
そこに行く道は疑はしい――結果は怪やしい、ひよつとすると破滅だ。

君は他の總てを捨て去らなければなるまい――私だけが君の唯一無二の神たらんと求
めるだらうから、

而かも君の求道は久しきに亘り且つ苦しいだらう。
君が今までに築いた人生觀の凡て、君の周圍の人々との凡ての調和を、共にかなぐり
捨てなければならないだらうから。
だから今の中に、これ以上の苦しい思ひをする前に、私を放れ給へ――君の手を私の
肩から放し給へ、
私を卸してくれ給へ、而して君の行くべき道に向つてこゝを去り給へ。
でなければ、そつと、試みに、大空の下の或る森陰か、岩の陰か、

何となれば屋根のかゝつた家屋の中には私は姿を現はさないから――若しくは人の集
る所にも、――而して書齋の中では私は嘔か、はにかみ屋か、まだ生れ出ぬものか、
死んだものゝやうに無爲だから、
然し多分は屹度、高い丘の上で君と共に、――誰れか他の人が數里の彼方から思ひも
かけず近づいて來ないやうに、それを見極めておいて、
或は多分屹度、航路の間に、若くは海の汀で、若くは何所かの島の中で、
そこで私の脣を接することを許すだらう、
仲間同志の接吻を、或は花婿としての接吻を、
何んとなれば私は花婿だから、而して仲間だから。
若くは君の望みとなら、私を君の衣物の中にたくし入れて、
君の心臟の鼓動を感じ、君を抱擁の中におくことが出來るやうにして、

君が大地大海に旅立つ時に私を伴ひ給へ。
かくて單に君に觸れるだけで私は滿足し、十分に思ふ。
而してかく君に觸れながら、私は靜かに眠つて永久に運ばれて行きたい。

然しこれらの諸頁を君は危險を冒さずに學ぶことは出來ぬ。
何んとなればこれらの諸頁と私とを君は理解し得ないだらうから、
彼等は先づ君から避け遁げるだらう、而してその後にも亦、――私はたしかに君から
逃げ遂せるだらう。
君が確かに私を引捕へたと思ふに相違ない時、見よ！
君は既に君から逃げてしまつた私を見出すだらう。

何んとなればこの本に含めてあることを書くためにこの詩集は書かれたのではないか
ら、
或はこれを讀んで君がその意味を知悉する譯には行かないから、
又私を尊敬して、誇らしげに私を讃美する人が、最もよく私を知つてゐる人ではない
のだから、
又私の愛に潤はうとする人が(極少數の外は)成功する譯ではないのだから。
私の詩はいゝことばかりをしはしない――同樣な惡いこと、ひよつとするとそれ以上
の惡いことをするのだから。

何んとなれば君が幾度も探り當てたと思つては、探りあてそこねたそのもの――私が
暗示したそのものなしには、凡てが何んの役にも立たないから。

だから私を離れ給へ、而して君の行くべき道に向つてこゝを去り給へ。

日の入りに私が聞く時に

日の入りに、私の名が乾杯と共に國民議場に於て讃へられたと聞いた時、やがて來た夜に於ても私は幸福ではなかつた。

或は又、私が大酒盛りをした時でも、私の企てが成就した時でも、やはり私は幸福ではなかつた。

然し、曉方に申分のない健康で寢床から起き上り、恢復した元氣で、歌ひながら、熟し切つた秋の大空を吸ひ込んだ時、

十五日目の月が光を失つて西に傾き、遂に朝の光の中に隱れ去るのを見た時、

たゞ一人、海沿ひを彷ひ歩き、裸かになつて、笑ひながら凉しい水の中に跳りこみ、

而して太陽の昇るのを仰いだ時、

而して、私の愛人なる親しい友が私の許に來つゝあるのを考へた時、おゝ、その時私は幸福だつた、

おゝ、その時一つの呼吸もより甘かつた、——而してその一日私の食事は普段以上に私をよく養つた——而して素晴らしい日が快く過ぎた、

而して次ぎの日が同じ歡びで來た——而してその日の夕方私の友は來た、

而してその夜、凡てのものが靜まり返つた中に、私は水が引きつゞいて汀に打上げる音を靜かに聞いた。

私は液體と砂礫とが相擊つさゞめきを聞いた、恰も私を視する爲め、私に向けられた私語(ささやき)のやうに、

何故なら私が嚴しく愛する一人が、ひえ〳〵とした夜、同じ夜着にくるまつて私の側

に横はり、

靜かさの中に、秋らしい月光のもとに、彼れの顏は私の方に倚りかゝると、

而してその腕は輕く私の胸のまはりに卷かれてゐたから——而してその夜こそ私は幸福だつた。

私は攻撃されてゐるのを聞く

私は制度を破壞せんと求めてゐると攻擊されてゐるのを聞く、
然し私は制度に贊成するものでも反對するものでもない、
（私と制度とに何のかゝはりがあらうぞ——又その破壞に何のかゝはりがあらうぞ）
私はたゞマンハタナに、及び內地と海沿ひとを問はず諸州の凡ての都市に、
畑と森に、水を切つて往來する大小の船の上に、
建物も、規約も、委員も、理窟もなく、
同志仲間の親密な愛の制度を建てようとするばかりだ、

私は坐して眺めやる

私は坐して、世の凡ての哀愁、凡ての壓迫、凡ての汚辱を眺めやる、
私は若い男等が自らに對して苦悶し、なし遂げた行爲を悔いて、竊かにすゝり泣くのを聞く、
私は貧しい生活に於て、生みの子達に虐待される母が、見向きもせられず、痩せ衰へ、絶望して死んでゆくのを見る、
私は良人に虐待せられる妻を見、——たくらみもて若い婦人を誘惑する男を見る、
私は嫉妬や、酬はれない戀の爲めの苦惱、それが秘やかになされるのを注意する——
私はこれらの姿を地上に見る、

私は戰鬪、疾病、虐政の働らきを見――殉教者と囚人とを見る、
私は海上の饑餓を觀察する――殘りの人々の生命をつなぐ爲めに誰れが殺さるべきか
と鬮をひく水夫達を觀察する、
私は勞働者や、貧乏人やの上に、又黑奴やそれに類したものゝ上に、倨傲な人々によつて投げられる侮蔑や輕視やを觀察する、
これらの凡て――果てしもなきこれらの醜陋及び苦楚を私は坐して眺めやり、
見、聞き、而して默す。

おゝ常に生きつゝ常に死につゝ

おゝ常に生きつゝ――常に死につゝ！
おゝ私の埋葬――過去と而して現在との！
おゝ私の埋葬、私がうつそ身で、誇らしく、いつものやうに濶歩する間に！
おゝ私の埋葬、永年私であつたものが今死んで（私はそれを悲しまない――私は滿足する）
おゝ私のつぎの亡骸から私を解放するために、その亡骸を捨てたところをふり返つて
私は眺めながら！
前方に進んで（おゝ生きつゝ！　常に生きつゝ）而して亡骸を後ろに見棄てるために。

假象に對する怖ろしき疑ひについて

假象に對する怖ろしき疑ひについて

結局は不確定だ――私達は迷はされてゐるのだといふことについて、

人のいふ信頼も希望も要するに虚構だといふことについて、

人のいふ墓の彼方の存續もたゞ美しい作り話に過ぎないといふことについて、

私が感得する所謂事象――畜類、植物、人類、丘陵、かゞやき流れる水、

晝の空、夜の空――色彩、運命、形體――人のいふこれらのものは（それらのものゝ

あるのは疑ひなくとも）單に幻影で、實在する何かはまだ知られてゐない。

（それらのものはあまりに屢それらのものから拔け出して、私を自失させ、私を馬鹿に

するかと思はれるが！

あまりに屢私はそれらのものゝ些かをも知らず、如何なる人もそれを知らないとおも

はされるが）

それらのものが、私の現在の立場から見て、私に現はれる姿は（現在さう現はれてゐ

ても）――全くちがつた見方によれば、それらのものがどんな形にどんな風に現は

れてゐるか知れたものではないのだが、

――私には、それらのもの、及びそれらの類ひのものは、不思議にも私の愛人や親し

い友あるが爲めに解決される、

私の愛する友が私と共に旅し、又は私の手を取つたまゝ長く坐つてゐる時に、

その時、私は嘗て語らなかつた、又語るべからざる睿智によつて滿たされる――私は

沈默する――私はそれ以上のものを要しない。

私は假象の問題に答へることも、墓のかなたの存續について考へることも出來ないが、
私は平氣で歩きもし停りもする——私は滿足する。
私の手を握つてゐる彼れが遺憾なく私を滿足させるから、

私はルイジアナで一本の槲の木の育つのを見た

私はルイジアナで一本の槲の木の育つのを見た。
全く孤獨にその木は立つて、枝からは苔がさがつてゐた、
一人の伴侶もなくそこに槲は育つて、言葉の如く、歡ばしけな暗綠の葉を吐いてゐた、
而してそれは節くれ立つて、誇りがで、頑丈で、私自身を見る思ひをさせた、
けれども槲はそこに孤獨に立つて、近くには伴侶もなく、愛人もなく、言葉の如く、
歡ばしげな葉を吐くことが出來るのかと私は不思議だ——何故なら私にはそれが出
來ないと知つてゐるから、
而して私は幾枚かの葉のついた一枝を折り取つてそれに小さな苔をからみつけ、

持つて歸つて――部屋の中の眼のとゞくところに置いて見た、
それは私自身の愛する友等の思ひ出のためだとおもふ必要はなかつた、
(何故なら私は近頃その友等の上の外は考へてゐないと信ずるから)
それでもその枝は私に不思議な思ひ出として殘つてゐる、
――それは私に男々しい愛を考へさせるから、
而かもあの槲の木はルイジアナの渺茫とした平地の上に、孤獨で、輝き、
近くには伴侶も愛人もなくて、生ある限り、言葉の如く、歡ばしげな葉を吐くけれど
も、
私には何んとしてもその眞似は出來ない。

炬火

わが西北にあたる或る汀の眞夜中に、漁夫の一群が見つめながら立つてゐる、
漁夫等の前に擴がる湖のかなたには、他の漁夫等がゐて鮭を突いてゐる、
獨木舟、おぼろに影めいた一物、それが黝ずんだ水を横切つて動いてゆく、
燃えさかつた炬火をその觸首(ふなさき)にかゝげながら。

この瞬間あこがれの物思はしき

この瞬間、あこがれの、物思はしき、
よその土地にも他の人がゐて、あこがれて、物思はしげであるやうに私には思へる。
獨逸にも、伊太利にも、佛蘭西にも、西班牙にも、見渡せばそれらの人を見付け出す
ことが出來るやうに思へる——或は更らに、更らに遠く、支那にも、露西亞にも、
印度にも——異邦の言葉を語りながら、
若私がそれ等の人々を知ることが出來たなら、自國の人に對してと同樣に、その人々
に思ひ寄るにちがひないと思へる。
私達は兄弟であり愛人であるに相違ないのだ。

彼等と共にあるのは幸福であるに相違ないのだ。

既にありしものと共に

一

既にありしものと共に、
父等及び母等と共に、過去の堆積と共に、
若しそれがなかつたら、今日の私が存在しなかつたそのものと共に、
埃及、印度、フエニシヤ、希臘及び羅馬と共に、ケルト人、スゑデナヴヒヤ人、亞拉比人及ひサキソン人と共に、
太古の海上の冒險——法律、工職、戰爭、羈旅と共に、
詩人、豫言者、神話、古傳、神託と共に、

奴隷の賣渡しと共に——情熱家と共に——叙情詩家、十字軍の兵士及ひ修道僧と共に、
私達がこの新大陸に來る前の古い大陸と共に、
そこに衰へ行きつゝある王國及諸王と共に、
衰へ行きつゝある宗派及び僧侶と共に、
私達の現在の大きな海岸から眺めてやるかの小さな海岸と共に、
前へと〳〵進みつゝ現代を生み出した過去の無量の年所と共に、
あなたと私とは到達し——亞米利加も到達して今年をなしてゐる、
今年— それは來るべき無量の年所を更らに未來に繰出しつゝ。

二

おゝ然しそれは年所ではない——それは私であり——それはあなたである、

私達は凡ての法則と共鳴し、凡ての既にありしものと共鳴する、
私達は豫言者であり、神託であり、修道僧であり騎士である——私達は易々とそれらを包含する、而してそれ以上を、
私達は無始にして無終な時のたゞ中に立つ——私達は善と惡とのたゞ中に立つ、
凡てのものは私達の周圍で振り動く——そこには光と共に闇がある、
太陽そのものすらが私達の周圍に振り動き、その衛星等も亦振り動く、
その太陽、そのまた太陽も、凡て私達の周圍に振り動く。
私（引き裂かれ、かき亂れて、これらの亂雜な年月のたゞ中にゐるけれども）
私はその凡てのものを知り、凡てのものであり、凡てのものを信じてゐる、
私は物質が眞實であると信ずる、精神が眞實であると信ずる——私は如何なる部分をも却けない。

私がどれかの部分を忘れたといのふか、
誰れであれ、何物であれ、私の所に來るなら、私は遂にはそれを見分けて見せるだらう。

私はアツシリヤ、支那、テゥトン國、ヘブライ國を尊敬する、
私は凡ての學說、古傳、神、半神を受け入れる、
私は古い傳說、聖書、系圖は一として眞でないものはないと知る。
私は凡ての過去の日はさうなければならぬやうにあつたのだと主張する、
而してそれがあつた以上によくあることは出來なかつたと、
而して今日といふ日もそれがあるべきやうにあることを——而して亞米利加といふ國

も亦、

而して今日も、亞米利加も、彼等がある以上によくあることは出來ないと。

三

米國諸州の名に於て、而してあなたと私との名に於て、過去、

而して米國諸州の名に於て、而してあなたと私との名に於て、現在。

私は過去が偉大であつたと知る、而して未來が偉大であるだらうと知る、

而して過去と未來とは神秘的に現在に於て交叉すると知る、

(私が代表する彼れ——普通な平民——の爲めに、而して若しあなたがその人なら、あなたの爲めに)

私のある所、或はあなたのある所、この現在に凡ての時代凡ての人種の中心があり、

而して私達に取つて、凡ての人種、凡ての時代から現はれ、又は現はれ來るべきもの

皆の意味があると私は知る。

創造の法則

創造の法則

力ある藝術家と統領とのための――生氣に充ちた教師等のための、而して米國の立派な文士のための、

氣高き學者のための、而してやがて來るべき音樂家のための。

凡ては世界の總和とその煮つまつた眞實とをよしとせねばならぬ、

これ以上に著しい主題はない――凡ての仕事はこの神聖な幽遠な法則を證例するだらう。

如何なるものが創造だと君は思ふのか、

自由に行動して、優越者の存在を認めないことの外に、魂を滿足する何ものがあると思ふか、

男も女も神に等しいものだ、それを色々に暗示する外に私は君に何物をも暗示し得ないのだ、

君自身よりも神聖な神はありやうはない、

而してこれこそは最も古い最も新しい神話が共に最後に意味するものなのだ。

而して君であれ誰れであれ、この法則に從つて創造を成就せねばならないのだ。

搖り動きやまぬ搖藍から

一

搖り動きやまぬ搖籃から、
歌の主なる物まね鳥の喉から、
九月の眞夜中から、
野の果にて續く荒れた砂濱を、床を拔け出た子供が、素頭の素脚で、唯獨り彷つた、
降りそゝぐ月の光の下、
生きてゐるものゝやうに交りあひ、もつれあふ神秘的な影の戯れの中、
茨、懸釣子の繁みから、

私に歌を歌つた鳥の思出から、
哀れな兄弟よ、お前の思出から――私が聞いたお前の歌の氣まぐれな調子から、
晩く昇つて來て、涙にしめつてゐるかのやうにじんだ黄色い半月の下から、
かしこ透明な霧の中の心痛と愛欲との前曲から、その前曲に對する私の心から
の感應から（それは死ぬまで續くだらう）
無數にそれから牽起された言葉から、
如何なる言葉よりも強く美しいその言葉から、
さういふものから、――今、昔の場所を又訪れてそれらを見聞きするにつれ、
海鳥の群れが、さゝ鳴いて、空に翔り私の上を舞ひゆくにつれ、
その昔に歸り、――凡てがのがれ去らぬ中大急ぎで、
一人の男――而かもこの涙から見ればものとまゝの子供にかへつた、

私は、砂の上に身を横へ、打寄せる波を見やりながら、
痛みと喜びとの歌手、現在と未來とのつなぎてなる私は、
凡ての示唆を捨てることなく取り上げながら、而かも速かにそれらを乘り越えつゝ、
回想の歌を歌はうか。

二

ある時、ボウマノックで、
丁度雪が解けた頃、——ライラックの香りが空にたゞよひ、而して五月の草が萠えは
じめた頃、その砂濱の或る茨の叢に、
アラバマからの二羽の旅鳥——その二羽は一緒に、
而して彼等の巣、而して褐色の斑を持つた四つの薄綠の卵、
而して毎日雄鳥は、あちこちと手近かな所を、
而して毎日雌鳥は、巣にかゞまつて、默つて、くり〳〵とした眼で、
而して毎日、珍らし盛りの子供なる私は、決して彼等に近寄らず、決して彼等を妨げ
ず、
注意深く覗き見しつゝ、鳥の生活を呑み込みつゝ、鳥の心を思ひやりつゝ。

三

「かゞやけ、かゞやけ、かゞやけ、
お前のぬくみをそゞき下せ、偉大な太陽よ！
私達がその光に浴する間——私達ふたりが一緒に。

ふたりが一緒に～
風が南から吹かうとも、風が北から吹かうとも、
夜が白く明けようとも、日が黑く暮れようとも、
故郷、故郷の山や川がどうあらうとも、
いつでも歌ひつゞけ、時をえらぶまい、
私達ふたりが一緒にゐる間は」

四

けれども突然、
殺されでもしたのか、雄鳥には解らないが、
或る朝雌鳥は巢にかゞまつてはゐなかつた、

その午後にも歸つては來なかつた、その次ぎにも、
而して復とは姿を見せなくなつた。

而してそれからといふもの、一夏中、海原の響きの中に、
而して夜は、晴れ亘つた滿月の光の下に、
しわがれた聲する波のさしひきの間に、
或は日の中は茨の繁みから繁みのひまを飛びかけりながら、
ちら〳〵と私は見、私は聞いた、獨り取殘された雄鳥の聲と姿を、
今はひとり取殘されたアラバマからのその旅鳥、

五

「吹け、吹け、吹け、
吹きおこせ、海の風よ、ボウマノックの汀沿ひを、
お前が私の伴侶を吹きおこすまで私は待つ、而して待つ。」

六

さうだ、星がきら〳〵とかゞやき出でた時、
長い夜もすがら、海苔のからんだ杭の先きに、壘み寄せる波にすれ〳〵になる程低く、
獨りぼつちの歌手は物思はしげにうづくまつた——見るものゝ涙をさそひつゝ。
彼れはその伴侶に呼びかけた、
彼れのそゝぎ出した或る心の意味を私は何人にもまさつて知つてゐる。

さうだ、私の兄弟よ、私は知つてゐる、
餘人はさうはしないかも知れない——然し私は凡ての歌聲を大事に貯へた、
何故なら一度、而して一度ならず、潜やかに、海岸の方に彷ひ下り、
默して、月の光を避け、私自身を物影にまぎらせ、
或時はおぼろな姿、反響、物の聲、物の形をその種類に從つて思ひ起し、
小休なくつき上げる波頭の白い指先きを思ひ起しながら、
一人の子供なる、素脚の私は、髪の毛を風になぶらせつゝ、
長く長く耳傾けたから。

七

「なだめる、なだめる、なだめる！
一つの波に近く後ろの波が來てなだめる、
而して又後ろの波が、かき抱き打ち重なりながら、どの波も寄り添つて、
けれども私の愛するものは私をなだめてはくれない、——なだめてはくれない。
低く月がかゝつてゐる、それはおそく昇つたのだ、
おゝそれは物うげに動く——おゝ私は思ふ、月もまた愛になやむのだ、——愛に。
おゝ物狂ほしく海が押寄せる、濱に押寄せる、
愛すればこそ、——愛すればこそ。

おゝ夜よ！　私の愛する者があすこの波間に、羽ばたきしてゐるのではないか？
あすこの白いものゝ中に見える小さな黑いあれは何んだ？
聲高に、聲高に、聲高に！
聲高に私はお前に呼びかける、私の愛する者よ！
高く鋭く私は波の上に私の聲をはり上げる、
確かにお前はこゝにゐるのが誰れだか、こゝにゐるのが、——知つてゐる筈だ。
低く傾きかけた月よ！
お前の黃橙色の中にあるあの小黑い點は何んだ？」
おゝそれは姿だ、私の伴侶の姿だ！

おゝ月よ！　この上彼女を私から距てないでくれ。

大地、大地、大地よ！

どちらを向いて見ても、お前は私に伴侶を返してくれることが出來さうに私には思へるが――お前がさうしてやらうとさへ思つてくれゝば、

何故なら、どちらを向いて見ても、朧ろげながら彼女の姿が眼に映るやうに私には思へてならないから。

おゝ現はれ出る星々よ！

ひよつとすると私が待ち望むその者も、お前達の一つと共に現はれ出るのではないだらうか。

おゝこの喉、この震へる喉！

大氣の中を更らに鋭く響き亘れ、

森を貫け、大地を貫け！

どこかでお前を捕へようと耳側てゝゐるのが、私の待ち望むその者にちがひないから、

歌ひ放て、曲を！

こゝでは淋しい――夜の曲を！

取殘された愛の曲を！　死の曲を！

黄色くうすれ行く物悲しいあの月の下の曲を！

おゝあの月の下の、――その月はほと〳〵今海のかなたに落ちこまうとしてゐる！

おゝ捨鉢な絶望の曲。

だが靜かに！　調子を低めて、
靜かに！　幽かにさゝやくだけにして、
而してお前も暫らく休んでくれないか、しわがれた聲に立騷ぐ海よ、
何故なら何所かで私は伴侶の答へる聲を聞いたやうに確かに思ふから、
聞きとれぬ程の――私は靜かにして、靜かにそれを聞きとらなければならない、
けれど靜かにばかりはしてゐられない、彼女がすぐに私の所に來ることが出來ぬかも
知れないから。

こちらだ、私の愛する者よ！
こゝに私はゐるのだ、こゝに！

いゝ程にかう押し低めた聲で私はお前に居所を告げる、
この物やさしい呼聲はお前への爲めだ、私の愛するものよ、お前への爲めだ、
あらぬ方におびき寄せられるなよ！
あれは風の口笛だ――私の聲ではない、
あれは飛沫のさゝめきさゝめく音だ、
それらは私の聲の影に過ぎない。

おゝ暗闇！　おゝ無駄な骨折り！
おゝ私は心が痛む、心が悲しむ。

海に落ち沈まうとする月のまはりの樺色の暈よ！

碎けて海に散るその光よ！
おゝこの喉！　おゝすゝり泣く喉よ？
おゝ凡てよ――而して私は夜もすがら甲斐もなく、甲斐もなく歌ひつゞけて。
それでも私は囁き、囁きつゞける？
おゝ囁きよ――囁きそのものが何とは知らず私に歌をさゝやき續けさせるのだ。

おゝ過ぎし日！　おゝ命？　おゝ歡びの歌！
大空の中に――森蔭に――野の上に、
愛した！　愛した！　愛した！　愛した！　愛した！
けれど私の愛はもはや、もはや私と一緒にはゐない！

ふたりが一緒に。――それは昔のことだ。」

八

悲曲は衰へて行く、
他の凡てが續き行く中に――星々はかゞやき、
風は吹き過ぎ――鳥の聲は絶えず響き亘り、
怒りのうめき聲を擧げて、老いていらだたしい母は、
灰色にさゞめくポウマノックの汀の砂にうめきつゞけ、
黄色くにじみ廣がつた半月は傾き沈んで、海面に觸れようとし、
我を忘れた子供は――その素脚を波に、その髪の毛を風になぶらせながら、
長く心の中に閉ぢこめられてゐた愛が今解き放たれて、遂にかき亂れほとばしりなが

ら、

悲曲の意味を、その耳その魂は速かに捕へながら、
今まで知らなかつた涙がその頰を流れ傳ひながら、
對話を――トリオを――各が語りながら、
低音を――老いていらだたしい母が絶えず叫びながら、
子供の魂に、ある溺れ沈んだ秘密の波音もて、物うげに調子を合せながら、愛
欲の詩人にならうとするその子供の疑ひに。

九

魔か鳥か！（と子供の魂はいつた）
お前の歌はお前の伴侶に對してなのか？それとも主に私への爲めなのか？
何故ならその時子供だつた私には舌の用は封じられてゐたが、

今私はお前を聞いた、
今忽然として私は何の爲めに私が生れたのかを知つた――私は眼覺めた、
而して既に一千の歌手が――お前のよりも更らに朗らかに聲高く、物悲しい一千の歌
が、一千の囀りの響きが私の心の中に命を得て現はれた、
而してそれは再び滅びない。

おゝ汝孤獨なる歌手、たゞ獨り歌ひつゝ――私を誘ひ出した。
おゝ孤獨なる私、耳側てつゝ――決して私はお前を永久に傳へることをやめまい、
決して私は遁げかくれしまい、決して人眞似はしまい、
決して滿たされざる愛の叫びを私から失はせまい、
再び私は自分が平和な子供であることを許すまい、以前に、夜に、かしこ

海のほとりで、黄色く物うげな月の下にゐたやうな。
そこで現はれ出た使者――火、心の裏の甘き地獄、
知られざる欲求、私の運命。

おゝ私に手がゝりを與へよ！（それは夜、どこかこゝいらに見えがくれしてゐる）
おゝ私がこれだけ持つのなら、それ以上をも持たしてくれ！
おゝひと言！　おゝ私の運命は何だ！（この後は私の運命は渾沌ではないかとおそれる）
おゝ歡び、懼れ、轉渦、人間の姿、あらゆるものゝ姿が、私のまはりに墓からの如く
現はれ出るよ！
おゝ幻影！　お前は大地と大海との凡てを包む！

おゝ朧ろ故にお前が私に向つてほゝゑんでゐるのか、眉をひそめてゐるのか知ることが出來ぬ、
おゝ影よ、たゞ一眼、ひと言！　おゝ極愛さるゝ者よ！
おゝ汝、親しましい女と男との幻影！
さあたゞひと言（私はそれを征服するのだから）
凡てに立ちまさつた最後の言葉、
意味深く、それがいひ送られた――何？――私は耳聳てる、
お前はそれをさゝやくのか、而して前からさゝやき續けてゐたのか、汝、海の波よ！
それはお前の潤へる緣（ふち）、しめつた砂から來るのか。

それに答へながら、海は、

ためらひもせず、せきもせず、
夜もすがら私にさゝやきつゞけ、而して日の出前には明らかに、
私に聲低く響やさしく「死」といふ言葉をつぶやいた、
而して又「死」を——絶えず、絶えず、絶えず「死」を、
その波のつぶやきの調べやさしさ、鳥のやうでもなく、又私のめざめた子供心のやう
でもなく、
けれども内密に私の爲めのやうに徐ろに近づき、私の脚もとにさゞめき、
そこからひそやかに耳根に這ひ寄り、やはらかく私の全身を包んでいふ、
「寂滅」「寂滅」「寂滅」「寂滅」「寂滅」。
それを私は忘れない、

而して私の暗い魔でもあり兄弟であるものゝ歌に溶ける、
彼れはそれを月の光の下にボウマノックの濱邊で私の爲めに歌つた、
氣隨にそれに應ずる無數の歌は、
その時眼覺めた私自身の歌だ。
而してその鍵となつたのは、波から送られた言葉、
最も麗はしい歌の言葉、及び凡ての歌、
かの力强くもやさしい言葉、それは私の脚に這ひよつて、
海が私に囁いたのだ。

十字架にかけられた彼れに

あなたの靈に私の靈を、愛する兄弟よ。
多くの人があなたの名を量りしらべて而かもあなたを理解し得ないでも氣にするな、
私はあなたの名を量りしらべはしない、けれども私はあなたを理解する（私の外にもさういふ人はある）
喜　を以て私はあなたを擇び分ける、おゝ私の道伴れよ、而してあなたに挨拶を贈る、
而してあなたと共にある人々にも、前の人にもあとの人にもー　而してこれから現はれるその人々にも、
私達は殘らず一緒に働き、同じ責任と同じ傳說とを傳へ移すのだから。

私達の數は少ない、けれども、同等で、所と時とにかけかまひなく、
凡ての大陸と凡ての族閥とを包含し――凡ての神學を許し、
人の同情者であり、理解者であり、共鳴者であり、
沈默して論爭と主張との間を行くが、論爭者をも、主張された事柄をも退けはしない、
私達は罵詈雜言を聞かされる――私達は四方から反目や、嫉視や、非難やに押寄せられる、
それらのものは、私達を取圍むために、容赦なく寄り迫つて來る、
而かも私達は全地球の上を、束縛されることなく自由に歩いて、思ふまゝに旅しつゞけ、遂に消し難い足跡をあらゆる時代の上に印しつけよう。
遂に私達は、男と女との凡てが、人種などの差別なく、未來永劫、私達があるやうに兄弟であり愛人であるといふことを、あらゆる時代に滿ち溢れさせよう。

汝法廷の審判に立てる極重悪人よ

汝、法廷の審判に立てる極重悪人よ、
汝、獄舍にある囚人よ――汝、鐵鎖につながれ手錠をはめられて、宣告にあつた暗殺者よ、
私を見ろ、私もまた審判を受け、牢獄にあるものではないか、
私も同じく殘虐で惡魔のやうで、手頸も腕も鐵の鎖につながれてゐるではないか。
汝、歩道をうろつく淫賣婦、或は部屋の中で無恥を極める淫賣婦、
お前を私以上に無恥だと呼ばうとする私は果して何者だ。

おゝ責むべき者！
私はそれを認めろ――私は自分をむき出しにする！
（おゝ讃美者よ！　私を讃美するな！　私に視辭を送るな！　あなた方は私を縮み上らせる、
私はあなた方のしないことをしてゐる――私はあなた方の知らないことを知つてゐる）
この肋骨の内部に私は穢れ屏息して潜んでゐる、
平氣らしく見えるこの顏の蔭に、地獄の潮は絶えず湍つてゐる、
淫慾と邪惡とを私は退けない、
私は犯罪者と共にあつて燃えるやうな愛を覺える、

私もその仲間だと私は感ずる――私自身が罪囚であり漁淫であるからだ。
而して私はこれから彼を退けることをしまい――私は如何して自分自身を退け得ようぞ。

名もない淫賣婦に

落着いて――私に對しては、寛ろいでおいで――私はワルト・ホヰットマン、自然があるやうに自由で快活だ、
太陽があなたを見放なさない中は、私もあなたを見放しにはしない、
水があなたのために輝くのを拒み、而して木の葉があなたのためにひらめくのを拒まない間は、私の言葉もあなたのために輝きひらめくことを拒みはしない。

わが娘よ、私はあなたと一つの約束をしよう――而して私はあなたが私に會ふことの出來るだけの準備をするやうに命じよう、

而して私が來るまでにあなたが忍耐强く、而して完全になつてゐるやうに命じよう。
それまで、あなたが私を忘れぬやうに、私は意味ある眼つきであなたに挨拶を送る。

見も知らぬ人に

行きずりに遇ふ見も知らぬ人よ！　どれ程慕はしげに私があなたを見てゐるかをあなたは知るまい、
あなたこそ私が求めてゐた彼れであり、求めてゐた彼女であるのに違ひない（さうした考へが夢のやうに私には起る）
私は確かにどこかであなたと歡びの生を生きたのだ、
お互が、こだはりなく、愛情に滿ちて、清淨に、熟し切つてふと行きちがつた時、凡ては思ひ出される、
あなたは、私と一緒に成長した私の少年であり、私の愛人であつたのだ、

私はあなたと共に食ひ、共に眠り、――あなたの肉體はあなたのみのものでなくなり、
又私の肉體は私のみのものでなくなつたのだ、
あなたは、あなたの眼、顏、肉のよろこびをお互が行きあふ時に私に與へる――あな
たもその代り、私の鬚、胸、手から取り收める、
私はあなたに物をいひかけることは出來ない――然し私が獨りで坐つてゐる時、又は
自分だけ夜眠覺めた時、あなたを考へることが出來るのだ、
私は待つてゐなければならない――私は屹度又あなたに遇ふことを疑はない、
だからあなたを見失つてしまはないやうに、私は氣をつけようよ。

あなたに

見も知らぬ人よ、あなたが行きずりに、私に遇つて、話しかけようと望むなら、話し
かけて惡い譯が何所にあらう、
又私があなたに話しかけて惡い譯が何所にあらう。

さゝげもの

一千の完全な男と女とが現はれる、
その各のまはりには、友達の群れが集る、而して快活な幼年と青春とが、さゝげもの
を持つて。

私が觀察をはじめる時

私が觀察をはじめる時、第一歩は私を殊の外喜ばした。
單なる事實、意識――これらの形態――運動の力、
いと小さな蟲、又は動物――觸覺――視力――愛、
最初の一歩で私は殊の外驚き且つ喜ばされた、
で、私は歩き出すや否や、更らに遠く行く心もなく、そこに長くとゞまり彷つて、有
頂天にそれを歌に歌ふのだ。

敵ではない私に入寇するのは

敵ではない、私に入寇するのは――敵のために私の誇が傷けられる恐れはない、
けれども私が身も世もなくこがれ寄る戀人達――見よ、彼等は私を征服する！
見よ武裝もなく、賴りも絶え、力盡きて、
思ひ切り卑劣にも、彼等の前に地面の砂を嚙む私を。

大統領リンカーン追頌歌

一

咲き殘りのライラックが戸口の庭に匂ひ、
夜空の西にたくましい星が沈み果てた時、
私は歎き悲んだ――而して返り來る春毎に、歎き悲しみつゞけるだらう。

お〻年毎に返る春よ！　春はいつでも三つのものを齎らして來る、
時をたがへず咲き出づるライラック、西の夜空に沈む星、
而して私の愛する彼れの思ひ出。

二

おゝかゞやかしく西に沈む星！
おゝ夜の影！　おゝ物思はしく涙ぐましい夜！
おゝ姿をひそめた逞ましい星！　おゝその星を隱した深い闇！
おゝ私を力なく虐げる手！　おゝ便りない私の魂！
おゝ魂の自由を閉ざして私を取りまく無情の雲よ。

三

石灰で塗り白められた板塀のほとり、古い百姓家の戸口の庭に、
高々と生ひ繁つてライラックの木叢は立つ、ハート形の濃綠の葉、

空向きに、先きぼそりな、香の高いやさしい花、
一葉毎にその葉は奇蹟、――前庭のその木叢から、
やさしい色の花房と、ハート形の濃綠の葉の、
その一枝を、花もろともに私は折る。

四

人里遠い沼地の物蔭にかくれて、
鳥一つ忍び〳〵に歌を唄ふ、
孤獨な鶺鴒、
その隱者は群れを離れ、ひとりにかへり、
たゞひとりにて歌を唄ふ。

血を吐くまでの歌！
生命から死ののがれ出る歌――（何故とならいとしい小鳥よ
若お前が唄ふ力を授からなかつたら、お前は死ぬにちがひないのだから）

五

春になつた大地の胸の上を、街の中、
小道、老いたる森の間（そこには菫が地の中からのぞき出て、灰色の岩地を彩つてゐる）
小道の右左の曠野の草の中を――眼路遠い草野を過りながら、
黒褐の畑の中、一粒ごとにその喪衣から萌え出でた黄金の穂波の麥畑を過りながら、

果樹園の中に、白く薄紅く咲きほころぶ林檎の木立を過りながら、
亡骸の休らふべき墓場を目ざして、
夜となく晝となく、一つの死棺は運ばれてゆく。

六

小道を過り、市道を過つて、
晝といはず夜といはず、大地を黝める叢雲の下を
巻きそばめた旗の群れ、喪章に蔽はれた町、
面紗した女等の如き各州の弔意、
長くうねり行く人の列、夜の篝火、
數知れずともされた炬火、沈默した人々の顔、帽被せぬ頭の海、

到着を待つ停車場、到着する死棺、而して思ひ沈んだ人々の顔、
夜空にひゞく挽歌、強くおごそかに高まる多くの歌聲、
死棺のめぐりにそゝがれる悲しげな挽歌のひゞき、
灯の暗い寺院、をのゝくオルガン、それらの間をわれらの死棺は過ぎてゆく、
鳴りひゞき、鳴りひゞく弔の鐘の音の中を
いつくしくも過ぎてゆく死棺よ、いざ、
私はこのライラックの一枝を贈らうよ。

七

（たゞあなた、あなた一人にばかりではない、
花と綠の枝とをあらゆる死棺に捧げるのだ、
朝のやうに生き〳〵と——かく私はあなたの爲めに歌を唄はうとするのだ、おゝすこやかにも神々しい死よ。

薔薇の花束で被はれて、
おゝ死よ！　薔薇と早咲きの百合の花とであなたを飾らうか、
さりながら今はそれにもまして春を魁けて咲くライラックで、
ゆたかに私は折る、木叢からその枝を折る、
手にあまるばかり齎らしてあなたのためにふりかける、
あなたの爲めに、而してあなたの凡ての棺の爲めに、おゝ死よ！）

大空を西に亘りゆく星よ、
一月の前、二人がさまよひ歩いた時のお前の思ひを今こそ私は知り得た、
神秘に寄み亘つた夜空の下を所定めず二人してさまよつた時、
澄みわたつた夜のかげの中をふたりしてさまよつた時、
私の方にうつむいて、夜毎、物いひたげなお前を見やつた時、
私の側近く降らんとばかり空低くお前が傾いた時、(餘の星々はそを眺めやるばかりだつたが)
ふたりおごそかな夜と共にさまよい歩いた時(故わかず私は眠らずに)
更け行く夜空の西の果てに沈むにつけて、物悲しげだつたお前を見やつた時、
寒く澄み亘つたそよ風そよぐ岡の上に立ち、
お前が空を過つて、夜の闇の底に失はれ行くのを見やつた時、

悲しみの星なるお前の終りが來て、夜の底に沈みかくれたやうに、私の魂も悶えのために打沈み果てたその時、お前の思ひを始めて知り得たぞよ。

九

唄へかしこなる沼地に!
おゝやさしいためらひがちな歌手よ! その歌もその招きも私は聞くが、
私は聞くが、私はやがて行く、私は納得してゐる、
さりながら暫らくはこゝに停らう——輝く星が引きとめるから、
訣れゆく友なる星が私を捕へて引とめるから。

おゝかしこ、なつかしき死者のためにどう歌はうぞ。
今は世にない偉大にもやさしいその魂の爲めに私の歌をどう飾らうぞ、
世になつかしい彼れの墓に何の香を薫(くゆ)らさうぞ、
東から吹き、西から吹き、
東の海、西の海から吹き送られて、曠原に相逢ふ海の風、
それにこの胸からの歌を添へて、
なつかしい彼れの墓を薫らさうか。

一一

おゝ部屋の壁には何を飾らう、
壁にかける畫に何を選ばう、

なつかしい彼れの葬堂のそのために、

蘭はな春、農園、家庭、
四月の頃の入日、ほのかにかゞやく青い煙、
遠空を爛らかして、華やかに、たゆたはしげに沈みゆく太陽の黄金の氾濫、
足許に生き〳〵と崩ゆる可憐な草葉、若緑に繁り合ふ木々の梢、
遠方(をちかた)の流れ、その面(おもて)のこゝかしこに風ぐもりした靜かな水、
川岸に沿うて連なる丘、空に浮き出た地平線の數々、及び影、
手近かにある町、そのこみ合つた人家、夥多の烟突、
生活(なりはひ)のさま〴〵、工場、而して家路を急ぐ工人。

一二

見よこの國土を、肉に徹し靈に徹して、
偉なるかなマンハタン、その尖塔と、輝き急ぐ潮と船、
豐かにも趣多い大地、日の光に濕ふ南方と北方の諸州――オハヨーの岸邊、ひらめき
　流れるミゾリー河、
牧草と穀草とに被はれて、眼路遠く連り亘る大草野、

見よ、物を物ともせで、落ちつき拂つた無類の太陽を、
吹きそめるそよ風の中に、藤色に明けゆく曙を、
しとやかに生れ出た限りなき慈悲光を、
凡てを光被する奇蹟――成就の眞晝を、

甘々しく近づく夕暮れを、――待たれた夜空と而してその星を、
すべてを照らしてわが町々の上に、人と大地とをかき抱きながら。

一三

唄へ、いとしい同胞(はらから)よ――お前の鄙びた歌をうたへ、
甘い愁ひをこめて、人の心をうつその歌を聲高く。

おゝ滑らかさ、自由さ、而して情けのこまやかさ！
私の魂を解き放しかきむしる！　おゝ素晴らしい歌手よ！
お前の歌だけだ私の耳傾けるのは――けれども星が私を引きとめる（然しやがてそれ
　も離れ去るだらう）

けれどもライラックがその鋭い香で私を引きとめる。

一四

今陽の光の中にあつて、眺めやる時、
夕暮れの殘りの光に照らされた春の野良、種播きの備へする農夫、
沼湖と森林とに飾られたわが鄕土の大きなひとりでの景色、
(風、嵐の吹きすさんだ後の) 神々しくも淨らかな美、
速かに暮れゆく午後の圓やかな大空、子供等と女との聲、
流れ動く海の潮——その上を船がどう走るかを私は見る、
豐かさを伴つて近づく夏、勞働にきほひ立つ野良、
無數な人家の一つ〳〵、日々のなりはひと食事などの輕い仕事の營まれる所、

人波の寄せ返し、群がり集る市街の道、それらを眺めやつた時——見よ！ その時その場に、
凡てのものゝ上に降り、凡てのものと混り、私をも共にくるめて、
雲は現はれた、長く尾を引く暗い影が現れた、
而してそれは死だ、その思ひ出だ、而してそれは死の聖なる智慧だ。

一五

謂はゞ死の智慧を私の右手に歩ませつゝ、
而して死の思ひ出を左手に近々と歩ませつゝ、
而して謂はゞ友等の手を取るごとく二人の間にゐて、
默して受け入れる夜の闇の中に私は自分をまぎらせた、

沼の汀、小暗い小道、
沈默の中に立つ淋つくしい檜と物淋しい松の木立を眼ざして。

その時人見ずする小鳥は私のみを受け入れた、
私に親しましい朽葉色の小鳥は私達三人の道伴れを受け入れた、
而して死の歌を、なつかしい彼れへの詩を小鳥は唄つた。

深く隱れた物蔭から、
香いやかな檜、しづまりかへつて物淋しい松の木立から、
その小鳥の歌は漂ひ出た。

歌のチヤームは私を狂ほしくした、
夜の闇に、手を取る如く道伴れと共にある時、
かくて私の衷なる聲は小鳥の歌と調べを合せた。

一六

―― 死の歌 ――

「來い、可憐ななつかしい死よ、
大地の限りを、隈もなく、しめやかな足どりで近づき、近づく、
晝にも、夜にも、凡ての人に、各の人に、
早かれ、おそかれ、思ひやりのやさしい死よ。

不可思議のこの宇宙は讃むべきかな、
その生、その喜び、諸々の珍らしい物象と智慧、
又その愛、香はしき愛——さりながら、さらに〳〵讃むべきかな、
冷靜に、凡てを捲きこむ、死の確實な抱擁のその手は、

靜かな足どりで小やみなく近づいて来る淋しき母よ、
心からあなたの爲めに歡迎の歌をとなへた人はまだ一人もないといふのか、
それなら私が歌はう——私は凡てにまさつてあなたの榮えをたゝへよう、
あなたが必ず來べきものなら、誤たず來て下さいと歌ひ出でよう、

近づけ力強い救ひ主！

それか運命なら——あなたが人々をかき抱く時、私は喜んでその死者を歌はう。
愛に滿ちて流れ漂ふあなたの大海原に溶けこんで、
あなたの法樂の洪水に有頂天になつたその死者を歌はう、おゝ死よ。

あなたに喜びの夜曲を、
又舞踏を挨拶と共に申出る——部屋の裝飾と饗宴も亦、
若しくは廣やかな大地の眺め、若しくは高く擴がる大空、
若しくは生活、若くは圃園、若しくは大きな物思はしげな夜、その凡てはあなたに適
はしい。
若しくは星々に護られた靜かな夜、
若しくは海の汀、私の聞き慣れたあの皺がれた波の聲、

若しくは私の魂はあなたに振向く、おゝ限りもなく偉大な、面紗深き夜よ、
而して肉體は感謝してあなたの膝に丸く巣喰ふ。

梢の上から私は歌を空に漂はす。
紆り動く波を越えて——無數の圃園と荒漠たる大草野とを越えて、
建てこんだ凡ての市街と、群衆に埋まる繫船場と道路とを越えて、
私は、おゝ死よ、この歌を、喜び勇んで喜び勇んで、空遠く漂はさう」

一七

私の魂の調べに合せて、
朽葉色の小鳥の高く強く歌ふ、

その節は、夜空の限りに擴がり滿ちて、いつくしく純み亘り、
小暗い松と檜との木立に聲高く、
沼水の香と生氣ある濕ひの中にほがらかに、
そして私は道伴れと共に夜の蔭に、

物見る力眼を離れて、
幻影の長きつらなり開け亘る。

一八

眼のはづれに私は軍隊を見る、
香なき夢の如くに幾百の軍旗を見る、

戰亂の煙の中を、彈丸に貫かれた幾百の軍旗を私は見る、
煙の中をかしこゝに運ばれ、破れ、血に塗れ、
やがて竿に殘る破れ布の幾ひら（凡ては沈默の中に）
而して折れはぢける旗竿。

私は見る戰死の骸を、骸の千百を、
而して雨にさらされた若人の白骨を、私はそれらを見る、
戰場の露と消えた兵士等の破壞の堆積の數々を見る、
けれどもそれらは世の人の見るところとは異るのを見た、
死者は自らは全く休息に入つた——彼等は苦しんではゐない、
生あるものが後に殘り苦しむのだ——母が苦しむのだ、

而して妻と子と、思ひ出に沈む友とが苦しむのだ、
而してあとに殘つた軍隊が苦しむのだ。

一九

幻影を過ぎ去り、夜を過ぎさり、
手をほどいて道伴れを過ぎ去り、
隱者なる小鳥の歌、その歌に合はす私の魂の歌を過ぎ去り、
（私の魂の歌、勝利の歌、死ののがれ出る歌、而かも變化極りなく、
ある時は低くすゝり泣き、而かもその節は澄み亘つて、高く低く夜空に漲り、
悲しげに打沈みて、聲もかすかに、警めの如く、而かも再び歡喜に破裂し、
大地を被ひ、空の限りを滿しつゝ

かの夜の物蔭に聞き得たる力強き歌聲にも似て）

ハート形の葉をつけたライラツクよ、お前をも見棄てゝ過ぎ去りつゝ、
春ごとに咲きかへり、戸口の前庭に咲くお前を見棄てゝ、
お前に向つての歌をつぐみ、
而して西方に面をむけて相交はりしお前を見ることもやめる、
おゝ夜空に銀の光を放つわがかぐやかしい友よ。

二〇

而かも私は凡て、その夜の收穫のどれをも捨てない、
歌、かの朽葉色の小鳥の驚くべき歌、
而してそれに合唱する歌、私の魂から呼び出された反響、

愁ひに滿ちた面もちして、かぐやきながら沈み果てた星、
高く生ひ茂るライラツク、さてはむせるばかりの香を吐くその花、
小鳥の招きに近づきつゝ私の手を取つた握手の友、
私の道伴れ、而して私は二人の間に、かくてそれらの凡ての記憶を、私はわがなつかしい死者のために貯へておく、
この鄕土のこの時代に生きた最も香はしく、最も賢明な魂のために、——而してこの詩も彼れのなつかしい思ひ出のために、
ライラツクよ、星よ、小鳥よ、私の魂の歌と共に、
かしこなる松の香ふ所、而して檜の木立のほの暗い所に。

聖なる死の囁き

聖なる死の囁き、それがさゝやかれるのを私は聽く、
夜の脣のざれ言葉――絹ずれを思はせる合唱、
徐ろに登り近づく恐音――神秘なそよ風、軟かく聲低く送られる、
（それともあれは涙の漣か？　人間の涙の漫々たる海原の）
ふり仰ぐかなたに、私はあり〳〵と叢雲を見る、
憂はしげに、しづやかに捲きちゞみ、聲もなくのびひろがり、交り合ふ、
時折り、おぼろに、悲しい遠方の星が、
現はれ、又――隱れながら。

（寧ろ或る分娩――或るおごそかな不死の誕生か、
眼にはさだかならぬ國境を、
或る魂は、今――越えてゆく）

群衆――その海原のさかまく波間から

一

群衆――その海原のさかまく波間から、一しづくの水がしめやかに私に來て、
さゝやくには「私はあなたを愛します、私はやがて死にます、
あなたを見、あなたに觸れたいばかりに、私は遠い旅を續けました、
あなたに遇つた上でなければ私は死ねません、
若し遇はずに死んだなら、あなたとは永久にはぐれてしまふでせうから。」

二

「今二人は遇つた、二人は見交はした、二人は安全だ。
安堵して海にお歸り、愛する者よ、
私も亦その海原の一しづくだ――二人はさうかけ隔つた間ではない、
御覽、この大きな輪廻を――凡ての聯貫、それは何たる完全さだらう！
けれども今あなたと私との間を大海が容赦なく隔てゝゐる、
謂はゞ一と時、私達は離れ〳〵にされてゐる――だがいつまでも離れ〴〵にされては
ゐない。
あせらずにおいで――暫らくの間――
毎日、日の沈む時、愛する者よ、私はあなたへの愛のため、
大空と、大海原と、大地とに親しみの挨拶を送つてゐるのだから。」

畑から來なよお父

一

畑から來なよお父、ペートから手紙が來たから、表戸に來なよお母、——兄さんの手紙が來たから

二

見よ、それは秋だ、
見よ、綠は黑ずみ、黃は更らに黃に、紅は更らに紅く、
樹々がオハイオ州の村々を冷え〳〵と住みよくさせて、その葉はそよとの風にもひらめいてゐる、
熟れた林檎は果樹園に、葡萄は蜘蛛手の蔓莖に垂れ下り、
（蔓に垂れ下つた葡萄の匂りがきこえるだらう、おそまきに蜂が來て羽音をたてゝゐる蕎麥の匂ひがきこえるだらう）
凡ての上には、見よ、雨あがりの大空が透明な落着きをもつて、素晴らしい雲を浮べてゐる、
大空の下にも亦、凡てが落付いて、美しく——野や畑は豐かに實つてゐる。
野良は見亘すかぎり豐作だ。
然し、今、その畑から父が——娘に呼び立てられてやつて來た、
入口の方に母が——取るものも取りあへず表戸にやつて來た。

大急ぎで母は來たが――何か不吉らしい、その脚は震へてゐる、
髪の亂れもなでつけず、被物(かぶりもの)をとゝのへる暇もなく。

慌てゝ封を切る、
おゝこれは息子の手蹟ではない、それだのにその名が認めてある、
誰れが息子の代筆をしたものか――おゝ打摧かれた母の魂！
その眼の前で物が泳ぐ――暗闇がひしめく――母は大事な字だけを拾ふ、
文句も切れ〳〵「銃丸が胸を貫き」「騎兵の衝突戰」「病院に運ばれ」
「目下危險なれど、やがて恢復可致候」

三

あゝ、今は、私には唯一人の姿ぎり、
潤澤な豐かなオハイオ、町々もある、野良もあるが、痛ましく顏は蒼ざめて、前後を
忘れ、氣も絶え〳〵に、戸の握手に倚りかゝる一人の姿きり、

「さう歎くなよお母」(年頃になつたばかりの娘が涙のひまからかういふ傍らには、稚
い妹達が口もきかずに呆れはてゝ縋れ寄る)
「ね、大事なお母、手紙にはペートはじき快(よ)くなると書いてある。」

四

裂れ、その若者は決して快くはならないのだ、

（あの雄々しい、ひたむきな魂は、この世の中を去るのが定なのだらう）

親や妹達が古屋の戸口に立ちすくんでゐる間に、若者は既に死んでゐる。

一人の息子は死んでゐる。

けれども母は氣を取りなほさなければならぬ、痩せた姿を黒の喪服につゝんで、

晝は碌々食べもせず――而して夜にはむらな眠りやうをして、眼さめがちに、

眞夜中に夢が破れると、泣きながらたつた一つの深い願ひを願ふのだ、

「おゝ、誰れも知らぬ間に、おいとまが出來ることなら――この世からいつの間にかの

がれ出て、おいとまして

あと追ひかけて、死んだ息子と一緒になることが出來たら」と。

和　陸

凡ての上に言葉、大空のやうに美しい！

戰爭とその虐殺の行爲は、年所と共に失せ亡びるに違ひない、

「死」と「夜」との姉妹の手はこの汚れた世界を絶えず竊かに洗ひ去り、又洗ひ去る……

……美しさ

……何となれば私の敵は斃れたから――私同樣に神聖な一人の人が死んだから、

私は彼れが顏青ざめ、動かずに、死棺の中に横はるのを見――そこに近寄る、

私は身をかゞめ、而して死棺の中のその青ざめた顏に私の脣を輕く觸れる。

涙

涙！　涙！　涙！

夜、寂寞の中……涙よ。

白い汀に流れては、砂に吸ひ込まれてゆく涙――一つの星も出てゐない――眞暗な物淋しさ。

頭を包んだ彼れの眼から洩れる濕つた涙――おゝその亡靈は何者だ――暗闇の中で涙を流がすその異形は何者だ。

瀧なす涙――おゝ泣く涙――息も絶え〳〵に泣き叫ぶその痛苦。

おゝ嵐、形相すさまじく、海沿ひを吹きまく、おゝ物凄い夜の嵐――風！　おゝその

はげしさ！　ゆゝしさ！

おゝ影よ――晝の間は、沈着な顏附きをして、規則正しい歩みで、威儀をつくろつた影よ。

夜が來て、人を離れて孤獨になると、おゝその時の涙の海、

涙の！　涙の！　涙の！

船の上、その舳首に

船の上、その舳首(へさき)、
年若き舵取り、心して舵をひく。

海岸(うみべし)の霧の中に一つの鐘淋しく鳴りひゞきつゝ、
海原の鐘――おゝ警めの鐘、その響き波にゆられて、

おゝ汝はまことにもまことなる警めを送る、海礁のほとりに鳴りひゞく鐘よ、
鳴りひゞきつゝ、鳴りひゞきつゝ、船を難破の地點から戒めるために、

されば心たくましく、おゝ舵取り、お前は鐘の警めに應ずる、
舳は轉(か)はす――荷積みした船は、進路をかへて、灰色の帆のもに駈せて去る、
美しく氣高き船は、價高き富を積みて、華やかに安らかに馳せて去る、
さりながらおゝ船よ、不壞(ふえ)の船よ！　船の上なる船よ！
おゝ肉の船――魂の船――そは帆走りつゝ……帆走りつゝ。

別れに臨みて讀者に

今、親愛なる讀者よ、私をあなたの顏のところに抱き上げよ！
お互に暫らく別れなければならない、私の脣からこの接吻を取れ、
あなたが誰れであらうと、私は特別にこの接吻をあなたに贈る、
「長いのを」――では又遇ふ折を待ち望まう。

鼓聲

蹶起し、激怒し、
私は警鼓を打ち、容赦のない戰を促がさうと思つた。
然しすぐ私の指はいふことを聞かなくなつた、私の首は垂れた、而して私は思ひ斷つて、
負傷者の傍らに坐してそれを慰め、或は默して死者を見守つた。

無限――萬有についての思索、
爾はわが神。

私を待ち望むに飽くことなく、未だ現はれざれども必ず來るべき
神々しい戀人、完全なる友人、
爾はわが神。

公明にして多能、美にして豐か、愛情に滿ち肉體は健か、而して靈に微妙なる爾、――

完成されたる人！
爾はわが神。

おゝ死――（生が既にその任を果し終へた後）
天上の宮殿を開き、そこに人を導くもの、
爾はわが神。

私が見、感じ、知る限りの最大最上のもの凡て、
（そは沈滯せる束縛を破つて――おゝ汝、魂、汝を自由にする）
爾はわが神。

若しくは汝、常に進みやまぬ不壞の道、總ての偉大なる觀念、人類の夢想、私の魂よ、
汝を高め解放する總てのもの、
凡ての雄々しさ、思ひ入れる情熱的行爲、
爾はわが神。

若しくは時間、若しくは空間、
地球の神々しさ神祕さ、若しくは私が眼に見且つ渴仰する私自身の姿、若しくは他の
人の見事な姿、若しくは耀灼たる太陽、若しくは夜天の星斗、
爾はわが神。

喜べ、船子よ、喜べよ

喜べ！　船子よ——喜べよ！
（魂にまで嬉しんで、死に臨んで、私は叫ぶ）
私達の生は閉ぢた——私達の生は始つた。
長い、長い繫船を私達は見棄てるのだ、
船はとう〳〵自由だ——彼女は飛ぶ！
彼女は速かに岸から遠ざかる、
喜べ、船子よ——喜べよ。

最後の祈禱

とう〳〵……しめやかに
頑丈な備へある家の壁から
嚙み合つた錠前の束縛から――閉鎖した戸の構へから……私を運び移せ。

音もなく私をすべり出させよ。
「柔和」の鍵で錠前をはづし――さゝやきの聲で
戸を開らけ、おゝ魂よ。

しめやかに、……氣をせかずに！
（お前の束縛はきびしい、おゝ可壞の肉よ！
お前の束縛はきびしい、おゝ愛欲よ）

冬の蒸汽機關車に

爾を歌はう！

吹きまく嵐、今のやうな――雪――暮れ行く冬のたそがれの中にある爾を！
鎧に身つくろひした爾を、爾の規則正しい烈しい鼓動を、而して爾の鋭い脈搏を、
黑い筒形の五體、金色の黃銅、銀光の鏡、
重々しい側槓、併行した接條、それは爾の側部で旋回し、走せちがふ、
爾の旋律、或る時は高まりつゝ喘ぎ叫び、――或る時は距たるにつれて細まつてゆく、
突出した逞ましい前燈は車頭にかゞやき、
長くたなびく蒸汽の靑白い長旒はさゝやかな紫を含み、

黑々と重げな煙の雲は煙突から湧き立ち湧き立つ、
爾の骨組の頑丈さ――旋條と瓣膜――細かく震へる車輪のまだゝき、
後ろに連なる一列の客車は、從順に快活に爾に隨ひ、
はやてにも日和にも、迅くとも、おそくとも、小やみなく走せてゆく。
「近代」の典型！　激動と精力との象徵！　大陸の脈搏！
せめては一度、來つて詩神に事へて歌に溶けよ、私が今爾を見やるそのまゝに、
嵐、而して齒向ふ陣風、而して降りしきる雪の中を、
晝間は、爾の警戒をその鐘に鳴りひゞかせつゝ、
夜には又、沈默の闇に目印の燈をひらめかしつゝ。

おめき叫ぶ美よ！

私の歌の中をひた走れ、爾の律なき音樂を集め、爾の燈を闇にひらめかし、
耳を劈く爾の汽笛もて狂ひ笑ひ、地震の如く轟く爾の反響に凡てのものを搖りさまし
つゝ！
爾自身の律は完全だ、爾自身の軌道は絶えて謬られない、
(女々しい立琴、滑らかなピヤノの甘々しい諧音ではない爾のは)
爾のおたけびは打震ひて巖や岡の木魂を呼びつゝ、
果て知らぬ草原を越え——湖の數々をよぎつて
無邊際の大空に、自由に、快活に、力强くもそゝぎ出されるそれなのだ。

牛ならし

人氣遠い北の方、平和にも牧歌的なその土地に、
この歌の主なる名高い牛ならし、私の友なる百姓は住んでゐる、
人々は三歳四歳のしたゝかものを馴らしてもらひにつれて來る。
世に珍らしい荒牛を引き受けて、彼れは易々と馴らし手なづける.
恐れもなく、鞭も持たず、庭の中をむづかり歩む若い牡牛に彼れは近づいてゆく、
牡牛は眼を怒らし、いら〳〵しながらその頭を空ざまにもたげてゐるが、
而かも御覽！　程なく牛の怒は納まる——見るまに牛ならしはその牛を手なづけてし
まふ、

御覽！　そのもよりの農家には、老いたる若き百頭からの牡牛――而かもそれを殘らず馴らしつけた男といふのは彼れだ、
牛共は彼れを見知つて――どれもこれも彼れになづいてゐる、
御覽！　或る奴は見事な畜生だ――雄々しいその姿！
或る奴は飴色……或る奴は斑（まだら）――一頭は白い毛が脊筋を流れて――或る奴は虎斑（とらぶち）、
或る奴は廣く立ちはたがつた角を持ち（上等種の證據だ）――御覽！　かゞやかしいその毛なみを、
御覽、二頭は額に星があり――御覽、肥えたその胴體と幅廣い尻つきを、
御覽、四足の上にゆるぎも見せず、しやんと立つ樣子を――御覽、あの素晴らしい恍
巧さうな眼を、
御覽、牛共があの牛ならしを見守る樣を――彼奴等は彼れが側にゐるのを願つてゐる

――行き過ぎたのを見送る彼奴等、
何んといふ慕はしげな表情だ！　彼れが彼奴等から離れると何といふ便りなげな樣子を見せる事ぞ。
――私は驚く、彼奴等には一體彼れがどう映つてゐるのか（書物も、政治も、詩もそこにはない――總てがない）
白狀するが、私は全く彼れの魅力が妬ましい――無口な無學なその私の友、
田舍の片隅で生活してゐる彼れを百頭の牡牛が慕つてゐるのだ、
人氣遠い北の方、平和にも牧歌的なその土地に。

私が書物を讀む時

私が有名な傳記を讀む時、
而してこれが（と自問自答する）著者が一人の人間の傳記と呼ぶところのものなのか
と。
而してそのやうに、誰れかゞ、私が世を去つた後、私の傳記を書くことだらう。
（恰かも誰れかゞ私の生活のちよつぴりでも本當に知つてゐたかのやうに、
所が屢考へることだが、私自身すら自分の本當の生涯を完全に知つてはゐないといつていゝのだ。唯僅かばかりの暗示――僅かばかりの散漫な、かすかな示唆、
それを私は、私の用途の爲めに、こゝに書き記さうとするだけだのに）

私が自分の頭を君の膝におく時仲間よ

私が自分の頭を君の膝におく時、仲間よ
嘗てなした懺悔を私は繰返す――大空の下にあつて、君に云つたところのものを私は繰返す、
私は自分が落着かない爲め、他人をもさうするのを知つてゐる、
私は自分の言葉が凶器で、危害に滿ち、死毒に滿ちてゐるのを知つてゐる、
（實に私はまがひもなく一箇の戰士だ、
あすこに劍銃を持つてゐるあの男や、赤筋のついたあの砲兵などゝは少し質が違ふのだ）

何故なら、私は平和、安泰、及び凡て定められた法則に對して、それを打壞すために
齒向ふからだ、
凡てのものが私を受入れてゐたとしたら、私はさうでもなかつたらうが、凡てのもの
が私を拒むが故に、私の決心は益堅くなるのだ。
昔でも今でも、私は經驗や、警告や、大多數や、侮蔑などに頓着してはゐない。
地獄と稱せられるものゝ威脅などは私に取つては無きに等しい、
又天國と稱せられるものゝいざなひの如きは私に取つては無きに等しい、
……愛する仲間よ！　私は君を私と共に促し立てたし、今も促しつゝあるが、我々の
行きつく先きが何であるかは私自身にも見當がついてゐず、
或は我々が勝利を得るのか、又は全然粉碎され打負かされるのか、それも知らないと
懺悔するぞよ。

自分の魂に

發足が近づくにつれて、
時が逼つて來るにつれて、影が——お前から雲が——私のまだ知らない、先きの世の
怖れが來て、私を暗らくする。
私は出で立つだらう。
私は諸ろの州を横行するだらう——然し何所を何時まで旅行するか、それは自分でも
判らない。
恐らくは間もなく、私が歌ひつゝゆく或る日か或る晩に、私の聲はいきなりやむにち

がひない。

おゝ魂！

凡てはこんなことになつてしまふだけなのだらうか、
日の光の下に遠く見まはす私の眼の働き、
女性と取りかはすたとしへなき愛、
大空の下にある私のよろこび——マンハツタの逍遙、
私が遇ひ得たやむ時なき好意——若き人達の私に與へる不思議な愛着、
私の秘やかな回想——一人旅の間に私が吸ひ込んだ風景、星々、動物、雷鳴、雨雲、
粗野で、無智で　氣まゝな私の口からの言葉、——數多い私の過失と放恣、
別れ際に友の脣が私の脣に與へた輕い接觸、

歩道や畑の上に私が殘した足跡、
それらは私の新たな發足にあたつて、こんなことになつてしまふだけなのだらうか、
この私の新たな發足にあたつて——而かもそれで十分だ、おゝ魂よ、
おゝ魂よ、お前と私とはむき出しに姿を現はした——それで十分だ。

大正十年十一月三日印刷
大正十年十一月十一日發行

（定價壹圓九拾錢）

有島

・ホヰツトマン詩集・
—第一輯—

譯者　有島武郎
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

發行者　足助素一
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

發行所　叢文閣
振替東京四二八九番
電話番町四八一二番

印刷所　東京市神田區宮本町五番地　中正社

印刷人　高橋治一

有島武郎

著作集

目次

(第一輯) 死	(第四十二版)	送料一冊七拾五錢	
(第二輯) 宣言	(第四十二版)	送料六錢	
(第三輯) カインの末裔	(第三十一版)	送料壹圓	
(第四輯) 叛者	(第三十三版)	送料八錢	
(第五輯) 迷路	(第三十二版)	送料壹圓八拾錢	
(第六輯) 生れ出る悩み	(第五十四版)	定價壹圓 送料六錢	
(第七輯) 小さき者へ	(第四十版)	定價壹圓 送料七錢	
(第八輯) 或女 (前編)	(第五十四版)	定價壹圓拾錢 送料六錢	
(第九輯) 或女 (後編)	(第四十四版)	定價壹圓 送料壹錢	
(第十輯) 三部曲	(第三十版)	定價壹圓 送料壹錢	
(第十一輯) 惜しみなく愛は奪ふ	(第四十八版)	定價壹圓 送料壹錢	
(第十二輯) 旅する心	(第二十五版)	定價壹圓 送料壹錢	
(第十三輯) 小さな灯	(第二十版)	定價壹圓 送料壹錢	

(迷路は金壹圓送料八錢宛)

私の著作集を合本して下さる讀者の便宜の爲に小說と感想文と及び今後引續き發表すべき紀行、戲曲等各裝幀も頁數も區別して置きます。而して二册若しくは三册毎に合本が出來るやうに一卷分の扉及目次を添附することゝします。……著者

新潮社出版

叢文閣出版

Calamus odoratus
to
"Scented herbage
of my heart"
W. W.